

KIVACU—RIOT!

Million01

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

13の魔族を続べると自負する魔族・ファンガイアと戦っていた人間とファンガイアのハーフ、紅 渡は兄である登 太牙と和解し人間とファンガイアの共存の道を目指し始めた

そこで渡はとある事情とある都市へと足を運んだ、それは海上都市と呼ばれる人工島であった。

仮面ライダーキバである紅 渡はその島で何を見るのか…

# 目次

序曲・運命の鎖	1
前奏・この都市の真実	34
居場所・ここでの生活	47
入門・学園編入	73
変身・仮面の戦士	90
交錯・ウエイクアップ!	130
二重奏・二人の牙	150
間奏・ブラックジャック	168
再誕・イクサ変身	186
疾走する運命	203



## 序曲・運命の鎖

海の見える窓を眺めながら赤い大型バイクを走らせながら僕：紅　渡はとある場所へ向かっていた。

海上都市：通所アクア・エデン。その名の通り海の楽園、海の上の都市と呼ばれる人工島だ。

特にバイクを運転するには問題ないけど、少し不安を感じてくる。

理由は色々あるけど：と、考えていると目的の場所へ着くようだ。

ただ、その島に入るには”入島審査”を受けなければならぬのだ。

名前や年齢を公的身分証を介して確認し荷物検査、簡易的な血液検査などと外国へ行く時みたいな厳重な検査が行われる。

他には公共交通機関であるモノレールでも行けるには行けるのだが、僕としてはバイクで行った方が早い。

”入島審査”を終えると、とりあえずホテルでチェックインをしたいのでホテルに向かおうと思った。

けど、僕はここは初めてなので土地勘もなく場所がわからない：

とりあえず周りの人に話を聞こうかなと思ひ、バイクを停めて辺りを見回した。

そこで目に入ったのは一人の女の子だった、赤い髪の少女だ。

珍しい髪の色だ、と思ひながら女の子を見る。ただ、他の人はおらずこの辺には赤い髪の女の子しかいなかった。

「……………」

眺めていた女の子と目があつた…思はず僕は目を逸らしてしまつた。すると女の子が僕の方に近づいてきた。

「ねえ、どうかしたの？」

さつきから私のことをジツと見ていたでしよう？」

うつ、普通に気付かれてた。ここでもないですと言つてしまえばいいのかもしれないけど僕はホテルを探している。それにここで話を切つてしまうと時間を無駄にするかもしれない…

僕は勇気を出して話を切り出そうとする。

「確かに見ていました…」

すこしオドオドしている感じを出してしまつていないか不安を感じてしまふ、けど僕はそれでも話を続けた。

「実は道に迷つてるんですけど…」

「もしかして旅行者なの？」

当然のように気付かれるけど仕方がない、なにせ本当のことだから。

「あつ、は、はい、一応……けど、初めて来た場所だから土地勘がなくて……」

「そう、だからそんなに挙動不審だったのね。それで、道を聞きたいのね」

やっぱり挙動不審だったんだ……僕の悪い癖だな。

「それでどこに行きたいの？」

「えつと……明確な名前とかはなくて、えつと、その……とりあえず僕は宿泊先を探してるんです、なるべく安いところの……」

あまり明確な場所を言えなくて申し訳ないと思いつつ答えを待つ。

「ああ、なるほど……宿泊先ね、それは当然よね」

「えつと……それで……」

若干、女の子は難しい事を考え始める。僕としては明確な場所を言えてないので話を切られても仕方がないと思いつつ待ってみる。

「……からへんだと……あそこからへんね、付いてきてくれる？」

まさか教えてくれるとは思わず少し驚いたが女の子の言葉通り付いていくことにした、当然バイクを引いて。

あまり人気のない歩道をバイクを引いて歩きながら女の子に付いていく。

「貴方、バイクに乗るの？」

多分、純粹に気になったんだろう…

「はい…そんなに自慢することではないんですけど…」

「けど、足があると便利よね」

「まあ、そうですね…」

気不味い雰囲気が漂う中、女の子が立ち止まった。

僕は首を傾げる。

「この真っ直ぐ行けば直ぐに着くわ」

目の前の道路の奥にあるビルを指差してそう言うと、

女の子は踵を翻し僕とは反対方向を向いて顔を合わせた。

「ここまで来れば、もう迷うことはないと思うわ。それじゃ、私はここで」

そう言うと女の子は僕が向かう反対方向へ歩いていき

「あ、ありがとうございます！」

深々と頭を下げ僕はお礼を述べる。

「それじゃあ、良き一日を」



女の子は去り際にそう言い歩いていく。僕はそれを見守る。

「良かったな、渡。良い人に出会えて」

見守っている僕と僕の懐から声が聞こえた。

「うん」

僕は当たり前のように男性の声に返事をした。キバットバットⅢ世、それがこの声の正体だ。

蝙蝠のような外見の、金色の身体と大きな赤目が特徴的な生物で僕はキバットと呼んでいる。

”入島審査”が終わるまではキバットは外で待つてもらい、そのまま終わるとそのまま戻ってきてもらったのだ。

キバットは知能などが高く、こういうことには気が利くからありがたい。

さて、僕もホテルに向かってチエックインしようかな、と思つたその時だった。

キキーー！

突如、僕の背後で甲高いスキール音が響いた。

「なんだ？」

流石にこれには少し驚いたのか、キバットが少しだけ頭を出す。

「さあ？」

僕は状況がわかってないので曖昧に答えた。

「まさか事故故じやないだろうな……けど、その割には衝突した音もしなかったただの急ブレーキか？」

キバットが喋りながら僕の懐から出ようとする。僕は出ようとするキバットを押さえる。

「やっぱり、こいつで間違いない」

「ちよつと、アナタたち——」

「大人しくしろっ！」

先程、女の子が歩いていった方向から、聞いたことのない二つの声と聞いたことのある声が聞こえてきた。

流石に気になり僕は声のする方へ向かった。そこには……

「この手を離しなさいっ」

「騒ぐんじやねえっ！」

複数の男が、先程の女の子を力づくで拘束しようとしていた。

そこからはもう僕の体が思考よりも早く動いていた。

「あ、あの……」

僕は近づいて複数の男のうちの一人の肩を掴んだ。

「あん？チツ…邪魔するんじゃないねえ！」

ドン、と振り向いた男が突き放すように僕の体を吹き飛ばした。

もちろん、なんの抵抗もなく吹き飛ばされ地面に手を付けてしまう。

「チツ…早くその女を乗せろ！」

「わかつてるよ！いい加減おとなしくしろおっ!!」

僕を突き飛ばした男はもう一人の男に指示を出す。

「キヤアツ！」

女の子を拘束しようとしていた男は強引に女の子を車に乗せ乗り込んだ。

誘拐犯と思わしき人達は車のエンジンを噴かすとそのまま車を出した。

「くうっ…」

僕は体を起こし事態を確認する。警察に連絡をするかそれとも…

「なあ、これは警察に通報したほうがいいんじゃないのか？」

キバットがそう提案してきた。確かに一理ある…けど…

「あくまあ、渡だからそういう選択を取るよな」

だが、キバットは僕の顔を見て全てを理解した。何も言わなくても僕の考えが大体わかる…それほど長い付き合いなのだ、僕とキバットは。

僕は直ぐに自分のバイクに跨り、ヘルメットを被る。そしてエンジンキーを解除し、

ハンドルを回しエンジンを噴かす。

よし、ガソリンもまだ大丈夫……

ガツ、とペダルを思い切り踏み僕はバイクを走らせた。よし、これなら車を見失うことはない……

車を追跡するといつても、バレて拳銃を発砲されたりしたらたまらないので距離を開けてバレないように追跡した。

ただ、かなり遠くへ行ったようで日は落ちる時間となっていた。車を追っているとある倉庫に停止した。

僕はバレないように少し遠くのところにバイクを停めて、慎重に倉庫に近づいた。僕に気付いた様子はなく少し安堵してしまう。

さて、どうしよう……僕はどうやって女の子を助けようか悩む。

「ここは変身して助けるか？」

キバットが小声で話しかけてきた。

「変身してもいいけどあまりキバのことはまだ知られたくないかな……それに——」

そこまで喋った時だった、僕の背後から殺気を感じた。

だが、遅かった……振り向こうと体が反応するも強い衝撃が僕を襲った。

「——っ!？」

僕の意識はそのままブラックアウトしてしまう。

誰かに体を引つ張られる感覚が僕の目を覚まさせた。

「ちよつと、外にこんな奴がうろついてたわよ」

誘拐犯の仲間と思わしき女性が後ろ手に手錠されたままの僕を乱暴に突き飛ばした。当然、受け身を取ることもできず、顔を地面に擦り付けるように叩きつけられた。

「つたく、しつかりしてよ。後をつけられてるじゃない」

「じゃ、じゃあ…もう通報されたんじゃ…」

「いえ、それは大丈夫よ。そんな様子はなかったから」

「それは良かった…」

「これで誘拐は成功ね」

誘拐犯二人と女性一人が僕の目の前でそんな会話をしている。

それに女性が何故か自信げに成功と言ってるのに少し疑問を持ってしまう。

「それで受け渡しは？」

「クライアントにはもう連絡を入れてある。すぐにここにくる。だが、気を抜くなよ」

「わかってる」

受け渡しにクライアント…話から察するに便利屋か何かだと予想できる。やっぱり旅行先ってこういう事もあるんだ、と思わず思ってしまう。

「クライアントがくるまでは休憩だ。お前はこいつらを見張ってる」

誘拐犯の一人がそう言い、僕達を顎で示してきた。

「えー俺がかよ？面倒くせえな」

「黙って働け」

「傷付けないでよ、大事な商品なんだから」

「わーってるよ。けどよ、こつちの奴はどうするんだ？」

そう言つて僕を睨みつける誘拐犯の一人。

「わかりきつたことを聞くな。始末するに決まつてるだろ」

「今すぐに殺るのか？」

男はそう言いながら懐からナイフを取り出してきた。僕は特に怯えることはしないのだがここは怯えたほうがいいのかな？という疑問が浮かんできてしまう。

けど、こういう一大事に懐のキバットが動こうとする。

「いや、もうちよつと後でいいだろう。取引が終わつてからで」

その言葉がキバットに聞こえたのか動きを止めた。けどなんとか免れたから安心だ。

「それじゃ、しつかり見張ってる。油断するなよ」

「へいへい」

誘拐犯一人とその仲間の女が外へ出ていった。見張りの男は少し離れた位置で荷物に座り込んでいる。

あまり、下手なことではできない。なにせ隣にはあの女の子がいるのだ。

「……………」

先程の女の子と目が合い、僕が思わず苦笑しながら頭をペコリと下げてしまう。

「アナタ、あの時の……………どうしてアナタがこんなところにな？」

「それは……」

貴女を助けたかったから、と言いたかったけどあまり言える立場ではない。現に捕まっているし。

「……………」

思わず僕は黙ってしまう。情けないと自分で思ってしまう。

「まさかとは思うけど、私のことを助けようとしてこんな目に遭ったの？」

「は、はい……………結局、捕まっちゃって……」

多分、今の僕は苦笑いをしているんだろう……鏡を見なくてもわかってしまうのが嫌になってしまう。

「けど、私を助けようとしてくれたこと、私のことを心配してくれたこと、それに関して

は素直に嬉しい」

なんとも言葉が出ない。なんて言葉も返せばいいかわからない。

「だから、ありがとう。それと……巻き込んでしまつてごめんなさい」

「い、いえ……僕が勝手にやったことだし捕まつたのは僕の責任です……」

「それどころか、自身の命が危ぶまれる事態になつただけだね」

女の子は半目で僕を見てきた。けど、僕はその言葉に思わず笑つてしまった。

「い、いえ……こんなのいつもと比べればまだマシな方です」

僕は笑顔を見せて女の子に言つた。

「あら、ずいぶん余裕そうね」

「え、いや……まあ……」

僕は言葉を濁らせながら曖昧に答えた。

「けど、大丈夫です……何があつても僕が守りますから」

そう何があつても……もう失いたくはない。彼女や母さん、父さんのように。

拳を強く握りしめる。

「!？」

僕の台詞に女の子は驚いたかのように目を見開いた。

「ふうん、まさかアナタの口からそんな台詞が出るとはね」



「まさか出るとは思わなかったんですか？」

「ええ、見るからに気弱そうな感じだもの」

確かに気弱そうとよく言われてしまう。

「けど、強がらなくていいわ。私が守ってあげる」

ここに来て強がりと思われてしまった。確かにそう見えてしまってもおかしくない。

そしてまさかのそっくりそのまま言葉を返されてしまった。

「普通、そういうのって男性が言うんですけどね」

僕はまた苦笑しながら言った。お互い謎のプライドの譲り合いが発生していなくもなかった。

「あっ——」

「……？」

「コホン——アナタは死なないわ。私が守るもの」

キリツ、と凛々しい顔で僕にそう言ってきた。僕を落ち着かせようとしているんだろうと思ってしまう。

「えつと……ありがとうございます？」

とりあえず僕はお礼を言っておいた。いや、多分違うんだらうけど。

「何か調子が狂うわね。これほどツツコミ易いネタをこう返されるとは。鈍いわね、ア

ナタ」

ツツコミ？ネタ？そう言われると僕にはわからない。あまりそういうものには詳しくない。それは自分でも自覚している。

「おい、うるせえぞっ！いつまで呑気にペラペラ喋ってんだよっ！」

流石に痺れを切らしたのか見張りの男が僕たちに怒鳴りつけてきた。

「……………」

「よーしよーし、いいから大人しくしとけ」

「ここで下手に刺激して怪我はしたくないので、僕は相手の指示に従った。

「ちよつと、どうかしたの？」

「別に気にすることはねえ。それよりそっちは？」

「ああ、クライアントのお出ました」

男の声と同時に倉庫の外から車のエンジンが聞こえてくる。

エンジンが止むとそのまま誰かが降りてくる音が聞こえてくる。そして足音と共に

一人の男性が倉庫に姿を現す。

逆立った短い黒髪と無精髭が特徴的なスーツ姿の男性が誘拐犯を見た。

「それ以上近づくな。金は？」

「まだ本当に依頼した”商品”かどうか、ちゃんと確認してないんだが？」

「金は用意してあるのか？」

いかにも取引現場つて感じの雰囲気です二人。

「金ならある。ここにいな」

クライアントである男は持っていたトランクを地面に置き、中を開いて見せた。

そこにはいくつもの一万円札の束があった。そして、クライアントは束の中から数枚引き抜き、ひらひらとちらつかせる。

「すげーな！」

「二千万、女一人を攫っただけで二千万だ。ファイにはしたくないだろう？ さっさと女を確認させろ」

「いいだろう、もう少しこっちに來い」

その言葉と同時に二人が近づいてきた。だが、それほど近いと言うわけではなく若干、距離があった。

「おい、そこら辺で十分だろう」

「あー、確かに似ているな。だが、本物か？」

クライアントは女の子を見るなりそう言い出した。

「んだこら。いちゃもんつけるつもりか」

「当然と言えば当然の反応のように男ががんと飛ばした。

「嘸み付くなよ。そんなつもりはない。が、こつちも似ている別人を掴まされたら、たまったもんじゃない」

「なら、どう取引するの？そつちが用意した金、全部本物だつて一枚一枚確認するまで取引成立を遅らせてもいいのよ？」

クライアントの言葉に反論するかのように女性がある提案をしてきた。

「そつちはどんな確認をしてもらつても構わないがな」

「……………」。OK。わかった、前言を撤回しよう」

「こいつはビジネスだ、ビジネスには信用が欠かせない。”商品”と”金”お互いに信用しようじゃないか」

クライアントは続けるようにそう答え、話を進めた。

「ちつ、最初からそう言えつてんだ」

「ところでそつちの男はなんだ？」

クライアントが女の子の隣にいた僕を睨んできた。

「些細なトラブルだ、気にするな。それよりも早く済ませよう。サッカー共に気付かれると、お互い面倒だろう？」

サッカー？サッカーって言えばあのサッカーかな？

けど、それだと文章がおかしいし…

「違うない」

クライアアントはトランクを閉めて、こちらに向かつて歩いてくる。

クライアアントは特に怪しげな行動はせず

そして誘拐犯の男の一人にトランクを投げ渡す。

「ほら、持ってけ」

そしてクライアアントは女の子の腕を取り、無理矢理立たせる。

これで取引は成立しあとは僕が殺されるだけ。

けど、僕には抵抗する術はあるのでこの状況を打開するのは容易い。けど、あまり他の人には見られたくないのだ。

ここはクライアアントが倉庫の外に行き、僕が殺される直後に動いた方が良さそう、と思いはじめた。

僕はとりあえず女の子の様子を見た。

「――」  
無言で僕を睨みつけて首を横に振る。何もするな、という合図なのだろう。

だが、当然僕は何かしようとは思っては、今は。

「しかし手錠を無理矢理切るのは手間だな。錠はもらっておこうか」

「これよ。でも、ここで手錠を外すのは止めておいた方がいいわね」

「言われなくてもわかってるよ」

誘拐犯の男達がトランクの中身を見てはしやぎ始めた。

クライアントはどう動くんだろう、と思いつながら動きを見た。

「うれしいか？それならなによりだ。さて、それじゃあ気分もいいところで本題に入ろうか？」

本題？クライアントの口から予想外の台詞が出た。

取引は終わっているはずなのに本題に入る…いや、僕が知らないだけかもしれない、そう思う。

「取引は終了したはずだ。俺たちはもう引き上げる」

だが、その本題というものに入らず誘拐犯達は引き上げようとする。

「いやいや、そういうわけにもいかないだよ。これがなんせコッチはお前らを捕まえないきやいなんのでな」

捕まえる？もはやクライアントの言っていることが僕には理解できなかった。

「はああ？」

その時だった。十数人もの謎の集団がこの倉庫に押しかけてきた。

拳銃を構え、誘拐犯達に銃口を向けた。

「全員動くな！抵抗は無駄だ、大人しくしろ！」

「貴様らを逮捕する！その場に膝をついて、手を頭の後ろに！」

逮捕？！こういうのつてドラマとかで見たことがあるんだけど、まさか警察？

僕は唾然としながら冷静に状況を確認する。

「うおおお!!?な、な、な、なんだあ!!?」

流石にこれは誘拐犯達には予想外らしく叫ぶ。

「動くな、大人しくするんだ！」

よく見れば軍服？らしきものを着ている人達もいる。

「罪状は誘拐だ。人身売買をおまけでできるかどうかは……俺が決めることじゃないから知らん」

クライアントの男が誘拐犯達にそう告げる。

いや、まさかとは思うけど……

「嵌めたわね！」

「取引自体はちゃんとしたもんだつたろ？それにだ、お前らが金額次第で何でも請け負うことは知ってる」

やっぱりということとは……このクライアント、警察？

「聞きたいことは山ほどあるんだ。どの件から調べてほしい？希望があれば言っていないで、なるべく沿ってやる」

「……くそつ。お前ら、陰陽局の連中か？ サッカー共を守ろうなんてどうかしてるぞ」  
「そいつは差別用語だな。あんまり乱暴な言葉を使っていると取り調べのときに痛い目見  
るかも知れんぞ？」

「一つアドバイスをしてやろう。心証を良くしておくことに越したことはない」  
若干、言ってることがわからない。そのまま三人は拘束された。

「よう、お疲れさん。矢来」

「無事に成功したようで何よりです」

矢来と呼ばれた誘拐された女の子は素っ気なくそう答えた。

「仕込みに時間がかかったからな。これで失敗したら上が五月蠅い」

「主任、犯人確保。倉庫内には他に人影なし」  
チーフ

「そいつはいい。なら、この件はこれで綺麗スツパリ解決じゃないか」

現れた女性が状況を説明した。

「ああ、矢来さん。お疲れ」

そして女性は矢来と呼ばれた女の子にそう声をかけた。

「お疲れさまです」

「これ、その彼の手錠の鍵。任せてもいい？」

そう言つて女性は僕を見るなり女の子に鍵を渡した。話から察するに僕の手錠の鍵



なんだろう。

「ええ、大丈夫です」

「それじゃあ、よろしく」

いつの間にか手錠が外されている女の子は僕に近づいてきた。

「えつとまさか、これって仕組まれてたの？」

「ええ、気付かなかったの？まあ、気付かなくて当然よね」

「君は一体……」

何者？と聞こうとするよりも先に女の子が口を開いた。

「私は特区管理事務局。通称、陰陽局の風紀班。治安維持のための特殊な組織なの」

そう言つて身分証らしきものを見せてくる。

えつと……特殊組織の一員つてことなのかな？

「なるほど……これは全て作戦の内だったんだ……」

「まあ、犯人も確保できたわけだし、そういうことになるかしら」

「つまり、僕が助けに行つても無駄だったんだ」

「……………まあ、結局何もできずに捕まりに来たようなものだったけど」

「まあ、そうだよね」

「けど、助けに来たことは嬉しかったし、格好はよかったかもね」

何故か僕はこの言葉を聞いて安堵したかのように力が抜けていった。

「という私の本心はどう?」

「……………」

えっと、どういう反応すればいいかわからない。

「改めて礼を言うわね。危険を冒してまで私を助けようとしてくれて、ありがとう」

「いや、気にしなくていいよ。僕が勝手にやったことなんだから」

「ただ、物語の王子様みたいにちゃんと犯人から救い出してくれたならもつと格好良かったのだけれど」

「いや、それは遠慮しておくよ」

苦笑いを浮かべながらそう答える。僕にはそういうのには向いてないと思ってる。

「ほら、後ろを向いて。手錠を外すわ」

僕は彼女の言葉に従って背を向けた。そして彼女が僕の手錠をはずした。

両腕が開放されて少しは気が落ち着いた。

「おい、矢来。ちよつといいか? 確認しておきたいことがあるんだが」

「了解」

クライアントだった男性に呼ばれそちらの方に向かっていく彼女を眺めた。

「一件落着だな、渡」

僕の懐に息を潜めていたキバットが周りには聞こえない声の大きさでそう言った。  
「うん、そうだね」

思わず僕の顔に笑みが溢れた。

「ほら、さつさと来いっ!」

「うるせえっ!引つ張るな、自分で歩く!」

「……チツ」

「……………」

目の前で誘拐犯達が警察へ連行される中、誘拐犯の女性が僕を睨みつけた。

「……………」

僕は思わず首を傾げた。その時だった。

「気安く触るなっ!離せっ!」

女性が暴れ始めたのだ。

「貴様っ!大人しくしろ!」

連行していた男の腕を振り払い、女性は手錠されたまま僕の方に走ってくる。

「え!?!」

流石に予想外の行動に僕は声をあげる。

「こっちに来い!」

そして女性は僕に組み付いてきた。思わず組み付きから逃れようとするも、相手の力が予想以上に強かった。

これでも力には自信があるのに振りほどけないのに疑問を持った。

「くっ!？」

僕の首に手錠をあてるように女性は後ろから組み付いてくる。

流石にこの状況では助けてもらえそうもない、なにせ下手に撃つと僕に当たってしまうのだ。

「近寄るな!こいつの首をへし折るよ!」

「っ!？」

その言葉に僕は驚いて目を見開いた。

「ちっ、面倒なことに。おい、そっちの二人は逃がすな!お前らは早くそいつらを連れて行け」

「りよ、了解」

クライアントを演じていた男性は誘拐の二人を連れて行くように促し、僕達を睨みつける。

「本当に人の話を聞かないな。さっきも言っただろ、心証はよくしておけと」

「無駄な抵抗は寄せ!」

「無駄かどうか、試してみなきゃわからないだろう？」

警察官の言葉に怯える様子もない誘拐犯の女性。

「この囲まれた状態でどうするつもりだ？何ができるんだ、お前に」

「そうね。例えば——こういう事ができるわ」

クライアント役だった男性の言葉に苦笑しながら次の行動に出た。

ガブツ、と誘拐犯の女性は僕の首筋に噛み付いた。

「……………え？」

流石に首筋には噛まれたことがないので少し痛く感じた。

そしてジュルル、と血液を綴ってくる。流石に血液を吸われるなんて言うことは初め

てだ。

「くっ……！」

必死に抵抗するもどうしてか常人ではありえない力で身体を抑え込まれる。

まさか…フアンガイア!?

そうだとしたらなんとかしないと…そう思い始めるのと同時に僕の視界が歪み始めた。更には四肢の力が抜けていく感じになり始める。

「くっ、くっ…！血を吸ってる、血を吸ってるぞ！吸血鬼だっ！」

吸血鬼？フアンガイアではなく…？

ガキンツ、と目の前の手錠が引きちぎられた。恐らく先程の力で引きちぎったんだらう……

「この野郎！」

警察官の一人が腰元の拳銃に手を伸ばし、素早い動作で銃口をこちらに向ける。だが、女性の方の反応も早く僕の身体で銃口から身を隠しそのまま男に向かって突撃した。

「なっ、卑怯なっ!?!」

そのまま戸惑った警察官から拳銃を奪い取り、その身体を蹴り飛ばし距離を取った。

「全員動くなっ！動けば、こいつの命はないよっ！」

「……………」

僕を人質に取られ皆が思うように動けないらしい。

「ほらね、無駄な抵抗じゃないでしょう？」

「吸血鬼が混じってるなんて聞いてないぞ、くそ」

「どうやら本当にファンガイアじゃないらしい…吸血鬼、確かに聞いたことはあるけど。」

「別に珍しくもないでしょう、吸血鬼なんてこの都市じゃ」

珍しくもない？まさか、この都市にはまだ吸血鬼がたくさん…

その思考をやめさせるかのように僕の側頭部に銃口を押し当てられる。流石に下手な動きはできなくなる。

「それで、どうするつもりだ？このままじゃ、どうせジリ貧だぞ」

確かにクライアント役の人の言う通りだ。このままでは膠着状態だ。

「言ったでしょう？こいつの命を奪うって」

流石にこの言葉には驚きを隠せないし冷や汗を隠せない。

「そうしたらもう終わりだ、それこそ逃げ場がない」

「そうね。確かに完全に殺せば、こいつは無視するでしょうね」

まるで策があるかのような言い方をする。

「けど、無視できない状況なら？これなら、足止めぐらいにはなるでしょう」

すると、女性は笑いながら僕から少し離れるのがわかった。

拘束が少し緩むもそれでも僕でも抜け出せない力で拘束されている。

そして僕の側頭部に突き付けられていたはずの銃口が別のところに向けられ――

パァンツ！乾いた銃声が倉庫内に響き渡り、血が撒き散らされる。

それは僕の血ではなく僕を拘束していた女性の血だった。

「……………さすがに痛いわね……………」

そんな感想を述べながら女性は自身の左手を見る。先程、女性は右手に持っていた銃

で、左手を掠めるように発砲したのだ。

肉を抉った手の甲から血が零れ、左手が真っ赤になっていく。

「なっ…」

さすがに僕はこの光景に絶句した。

なぜ、自分の腕を撃つたのだろうか？その疑問が頭から離れなかった。

「まさか、お前っ!？」

クライアント役の人が警戒しながら叫んだ。

「そうよ！これなら、助けざるを得ないでしょう！アンタたちが無視するわけがないわよねえっ！」

僕の見えないところで話が進んでいく。ますます訳がわからない。

「ちっ、この野郎！」

クライアント役の人が素早く銃を構えた。

「はんっ、撃てるの？こいつ(こいつ)」

「ちっ」

真っ赤に染まった腕で再び強めに拘束し、楯にした女が脅しをかける。

くっ、どうすれば…これは本当にマズい…打開策はあるにはあるけど、あまり人には見られたくない。



そもそも、力比べでは拘束はできない…ならば、相手の拘束を強制的に解かせるしかない。

だから…

「あーもう！これはまじでやばいぜ！」

突如、僕の思考を止めざるを得ない状況が起きたのだ。

そう、懐のキバットが叫び出し飛び出てきたのだ。

「なっ!？」

その場にいた僕もこの状況に驚いた。

まさか、キバットが勝手に懐から出てくるなんて僕でも予想はしていない。

「この吸血鬼女！渡を離しやがれっ！」

キバットが女性の持つていた拳銃に噛み付くと無理矢理引き離し宙へ投げ飛ばす。

「な、なによっ！こいつ！」

更にはキバットは女性に何度か爪で攻撃をし始めた。

ファンガイアを怯ませる程の力を持つキバットの攻撃はさすがに耐えきれないのか女性が拘束を緩め突き飛ばされ、僕が開放される。

「ふうー…これで安心だな」

そうするとキバットが倉庫の外の方に出ていった。

「チツ…次から次へと何なのよー」

女性は悔し紛れなのかパチンツ、と指を鳴らした。

ボウウウツ！と突如目の前に炎が現れた。

「!?」

さすがに目の前の光景には信じられないが炎と距離を取る。

目の前の炎と煙が邪魔で周りが見えず、何が起こってるかわからない。

「渡ー!」

一旦、倉庫の外に出ていったキバットが戻ってきた。

「キバット!なんで出てきたのさ」

「なんでってそれはお前を助けるためだよ」

「その気持ちはわかるけどなんであのタイミングで?」

「渡、吸血鬼って知ってるか?」

僕の質問に答えずキバットが質問で返してきた。

「人間の血を吸って生きる、魔族でしょ?本当にいるかどうかはわかんないけど」

「そうそう、他には?」

「日光や十字架、ニンニク、水が苦手で…確か吸血鬼に血を吸われた人間は吸血鬼に

……」

「ああ、一般的にはな」

「一般的には？」

「色々と説明を省いて重要なことだけを言っておくぜ、さつき吸血鬼に血を吸われた人間は吸血鬼になるって言ったよな？」

「うん」

「あれは間違いだ」

「間違い……？」

「そう、逆なんだ。吸血鬼の血を吸ったやつは吸血鬼になる可能性があるんだ、それに少量でも飲むとヤバい」

「えつと……それと何が関係が……あつ！」

「そう、気付いたようだな。渡、お前は下手したらあの吸血鬼女に血を飲まされそうになったんだよ、俺が助けに行かなきゃ今頃どうなってたかわからないぜ」

「なるほど……ありがとう、キバツト」

「へへーん、いいってことよ」

「それにしてもよく知ってるね」

「ああ、実はな——つてヤベツ」

「………？」

キバットが突如話の途中で何かに気付きどこかへ飛んでいく。

それと同時に。まるで元から燃えていかなかったかのように炎が消え倉庫も元通りになっていた。

「な、なにが……」

思わず状況を確認するために周りを見回した。

「この、クソツタレ！ そんな力があるくせに人間なんか助けやがって！」

「人間との共生、それがこの都市に住む吸血鬼の原則のはずでしょ？ 知らないとは言わせないわ」

見ると誘拐犯の女性と女の子が対峙するかのように向かい合っていた。

「ふざけないでっ！ サッカー呼ばわりされて、いつまでも見下されたままで、黙ってられるわけないでしょっ！」

「なんともしまらない主張ね。それはね、ただの僻みと言うのよ」

「私に言わせれば、アナタのようなファツキン・サッカーがいるからいつまでも経つても私達はサッカー扱いなのよ」

「うるさい！ うるさアアアいつ！」

女性の叫びをかき消すように、女の子が腕を振るう。

するといつから停止していたかわからないが、空中で停止していた無数の弾丸が動き

始めた。

それは女の子ではなく女性に向かって。

「きゃっ!?!」

一瞬の隙をついて、女の子は地面を蹴って女性に肉薄し距離を詰めた。

そして、女の子が手を振り払ったその時だった。突如、密度ある圧力が倉庫内で吹き荒れた。

その力に耐えきれず女性の体は宙を舞い、叫びながら回転する女性はそのままだ面に衝突。

更にはバウンドしながら数メートル先の木箱に突っ込んでいった。

「んがおっ!?!」

情けない声を上げながら気絶する女性。これで事件が解決したと見える。

そう思うと力が抜けてくる。脛が重くなり光が小さくなり周りが暗くなっていく…

「対象は沈黙。人質の確保に——マズい、意識がありませんっ!」

「クソツタレっ!早く車を回せ!」

遠いところから声が聞こえてる…だけど、それよりも意識が…

## 前奏・この都市の真実

ファンガイア、13の魔族を統べると主張していた魔族で人間達を道具と見ていた存在だ。

僕はかつてファンガイアと戦ってきた、ブラツデイローズと呼ばれる父さんの作ったバイオリンに従って。だけど、ファンガイアの人達と触れ合ったことで、ファンガイアも人間と同じ心を持っているのがわかっていった。

そしてファンガイアの王である兄さん・登 太牙と死闘を繰り広げた。そして死闘の末兄さんと和解を果たし、人間とファンガイアの共存の道を歩み始めた。

「……ん……」

ふと、僕は目を覚ます。柔らかいものの上に仰向けで倒れていた身体をゆっくり起こすように動かした。

目に覚えのない部屋に首を傾げながら辺りを見渡す。

清潔感が感じられる白を基調とされた部屋が目にも余る。さらには部屋中に消毒液の匂いが漂っていた。

「ここつて病院…?」

近くにいた女の子に目を向けて自然とそう呟いた。

意識を失う前に僕が助けようとした子だった。

「随分と冷静ね。それはいいわ。昨日のこと、どこまで覚えているの?」

昨日……僕は頭に手をやりながら昨日?のことを思い出そうとする。

もし、今が誘拐事件の次の日だとしたら昨日のこととは誘拐事件のことなんだろう。

「えっと……僕が君を助けようとして捕まって、その後これが囿捜査って事がわかつて

……」

「……それで?」

女の子が続きを促すように僕を見た。

「それで、僕があの子の人に人質にされてなんとか抜け出したけど炎が出てきて……今度

は炎が消えたと思つたら女の子の人が吹き飛んで」

「要するにアナタが気を失うところまでね」

「そう、なるのかな……そういえば昨日の出来事って……」

「どこから説明すればいいのかしらね……とりあえず詳しい説明は先生を呼ぶからちよつ

と待って」

女の子はそう言うのと僕のところのナースコールを鳴らし先生を呼ぶように促す。

僕はベッドから立ち上がり、身体の調子を確かめた。

軽く腕を回したり、屈伸したりしたが何も異常はなかった。

だが、ここで気になった事があった。キバットだ。

そういえば炎が消える直前に倉庫の外に飛んでいってからどこに行つたかわからない。僕の元にも帰ってきていない。どこに行つたんだろう？

「失礼するよ」

そんな疑問を持つていた傍ら、一人の男性が病室に入ってくる。

僕は振り返つて誰が入つたのか確認する。

長身で黒縁メガネをかけており、スーツの上に白衣を着こなした優しそうな男性だった。

「君が紅 渡君かな？」

僕の方に近づき顔を見てそう問いかけてきた。

「はい、そうですけど。アナタは？」

「僕は扇 元樹。この島で医者をやっている者だ、よろしく」

「よろしくお願ひします」

元樹先生の挨拶に僕も返す。

「それで彼女は……いや、彼女とはもう知り合ひだったかな」



元樹先生は隣に立つ赤い女の子を見て僕にそう言ってきた。

「知り合いですけど……名前は聞いてないです」

そう言つて僕は女の子を見た。

「まだ自己紹介はしていなかったわね。それじゃあ、改めて……私は矢来 美羽よ。美羽でいいわ、よろしく」

「僕は紅 渡です。よろしくお願いします……」

僕も彼女……美羽ちゃんに軽い自己紹介をした。少し敬語になつてしまつたけど。

「さて、自己紹介も済んだところで、本題に入ろうか」

その言葉が発せられた瞬間、場が重くなつたような感じがした。

「君は昨日の不思議なことの数々、疑問に思っているはずだ」

その言葉に僕は小さく頷いた。少しだけキバツトから聞いたけど全て聞いたわけでもない。

「君の首筋を噛んだ、女性の正体……それは吸血鬼だ」

「吸血鬼……」

「ああ、そう簡単には信じられないとは思うけど」

確かに普通の人ならば信じられないと思うだろう。それを笑い事で済まされるかもしれない。けど、僕としては無視できない発言だった。

「君は吸血鬼についてどれぐらい知っているんだい？」

「あくまで一般的に知られているところまでは……」

「やっぱりか……けどいくつか偽りが混じっているんだ」

偽り……それは昨日、キバットから聞いた話だ。

「例えば、こういう話を聞いたことはないかい？」吸血鬼に血を吸われた者は吸血鬼になる」

「はい、有名な話ですから……」

「だけど、それは間違っているんだ。」吸血鬼の血を飲んだら吸血鬼になる」

僕はその言葉を聞いて女性の真つ赤に染まった腕を思い出す。

「まあ、君は吸血鬼にならなかつたようで何よりだ」

そこは知っているけど、こう素直に話されると少し疑問に思う。

「あの……こんな話を僕にしていいんですか？」

「もう巻き込まれたしそのまま疑問持たれたまま帰ってもらっても困るからね、本土に変な噂が立つとここの評判が悪くなるでしょう？」

僕の疑問に美羽ちゃんがキツパリと答えた。

「けど、僕がその事実を知り合いに話してしまう可能性が……」

「あら、私はアナタが秘密をバラすような人には見えないけど……？」

僕の言葉を遮るように美羽ちゃんが返答してきた。

まあ、確かにそうかもしれない。けど、僕だったら…

「けど、色々あったから上の人と話し合いが必要かもね」

上の人…：恐らく美羽ちゃんが所属している組織のお偉いさんのだろう。

「下手したらどうなるかわからないわ」

思わず僕はその言葉に固唾を飲む。

「まあ、その話はまた後日として、まだ君にはこの病院で暫く安静にしようよ」

「えっと…それは入院ってことですか？」

元樹先生の言葉に僕は少し嫌な顔をしてしまう。

「そうだね。けど安心してくれ、明後日ぐらいには退院できるから」

僕の顔を見て思ったことを察したのかそう言ってくれる。

「ちなみに聞きたいですけど…ここに吸血鬼がいてもおかしくない場所なんですか？」

『ほらね、無駄な抵抗じゃないでしょう？』

『吸血鬼が混じってるなんて聞いてないぞ、くそ』

『別に珍しくもないでしょう、吸血鬼なんてこの都市じゃ』

昨日、あの女性が言った台詞が脳内で再生される。

「ああ、この都市はね、吸血鬼という存在が居住することを国家に認められた、国内唯一の場所なんだ」

国家に認められた…？

人間と吸血鬼が共存している…？

「人間と吸血鬼が共存しているんですか…？」

「うん…まあ、一応ね」

僕の問いに曖昧な台詞を返す元樹さん。何かあるのだろう…

「だいたい、わかりました。教えてくれてありがとうございます」

僕は深々と元樹先生に頭を下げる。

「まあ、色々と頭が混乱しているかもしれないから僕はここで失礼するよ」

「わざわざ、すみません。僕のために」

「いいよ、気にしないで。それじゃ」

もう一度、元樹先生に頭を下げて感謝する。

その言葉を聞いて元樹先生は僕に笑顔を見せて病室を出ていく。

「……………」

僕は何か言いたげそうな美羽ちゃんの方を見る。

「えっと……どうかしたの？」

「えっと……いえ、何でもないわ」

美羽ちゃんは何か言おうと口を開くが直ぐに顔を俯かせて、そう言い病室を出ていった。

「……………？」

吸血鬼が住むことができる街、か……

それはある意味、僕達の目的に近い道なんだろう……

人間と吸血鬼……

「そういえば、この都市に来てまだ兄さんに連絡してないや」

僕は自分の携帯を開き電話をかける。

電話をかける相手は僕の兄である、登 太牙だ。

兄と言っても両親ともに同じというわけでもなく、僕と兄さんは異父兄弟なのだ。

『もしもし』

携帯越しに兄さんの声が僕の耳に聞こえてくる。

「もしもし、兄さん？」

『その声、渡か？随分と連絡が遅かった気がするが……』

「うん、ごめんね。初日に色々であって…」

本当に色々であった。誘拐事件を目撃するし、助けに行つて捕まつて。

「囹捜査に巻き込まれて吸血鬼に血を吸われて…本当に色々であった。」

『それで何か分かつたか?』

「えつと……」

思わず僕は言葉が詰まる。頭の中に吸血鬼の事を話していいんだろうか? そう思つてしまった。

『一応、確認しておくがお前の仕事はこの都市に身を潜めているファンガイアを探すと。もちろんキバの正体も知られてはならない』

「うん、わかつてる」

今は和解をしたファンガイア。だけど、それでも人間達に手を出すファンガイアがまだ数多くいる。

そのファンガイアを倒すために僕はここに来た。兄さんは本土の方でファンガイアを統一するのに忙しいし、名護さんは本土の方で人間達に害を為すファンガイアを倒してもらっている。

だから僕が来た。僕も兄さん達の役に立つ為、人間とファンガイアの共存を目指すために。

『なら、いい…それでどうだ？そっちで上手くやっていけそうか？』

『どうだろう…ちよつと面倒ごとに巻き込まれちゃって…』

『面倒ごと…？』

「うん、それで今入院中なんだ」

『なに、大丈夫か!?怪我とかはしてないか!?』

兄さんが執拗に聞いてくる。たまに兄さんは過保護なところがある。

「う、うん、大丈夫だよ。直ぐに退院できるしそんなに心配しなくて大丈夫だよ」

『……そうか、あまり無茶はするなよ。渡』

「うん、ありがとう。それじゃあ切るね」

僕は電話を切り、溜息を付いた。

僕がこの海上都市アクア・エデンに來た目的はただ一つ。この都市で身を潜めているファンガイア

を探すこと、そして悪さをしているファンガイアを倒す。

それだけだ、けどどれだけここにファンガイアがいるかわからないけど…長居するこ  
とは確実だと思う。

ここでいつまでも離れない疑問が大きくなる。

キバツト、一体どこにいるんだろう…

コンコン、と突如窓を叩く音がした。

「……………?」

僕は気になり窓に近づきカーテンをめくった。

「おーい、渡ー!」

そこには翼で窓を何度も叩くキバットがいた。

「キバット!?!」

僕は窓を開けてキバットを中へ招き入れる。夜特有の冷たい風が僕の体を突き抜けるが、キバットが入ってきた瞬間に直ぐに窓を閉めた。

「うー寒いぜ」

「キバット、今までどこいたの!?!」

キバットがそう言いながら僕のベッドの中に入って体を温める。

「あー少しここの都市を見て回っただけだ」

「そうなの?」

「ああ、それに渡に何かあるかもしれないから離れたんだ」

「何かある時は一緒にいてほしかったんだけど」

「そうはいかないぜ。実際、渡は入院したろ?もし俺があそこでバレたら溜まったもんじゃない。キバの事を他人にバレたくないだろ?」

「うん…」



僕はキバットの台詞に頷いた。

「それでそれでどうなったんだ？」

「どうなったって？」

「吸血鬼のこと、何か知れたのか？」

「うーん…キバットが教えてくれた以外にこの都市は吸血鬼が住める場所って分かったよ」

「なるほどな…吸血鬼が住める都市か」

キバットが何か考えるように呟く。

「そういえばキバット、聞きたいことがあるんだけど」

「ん、なんだ？」

「昨日の続きなんだけど、何で吸血鬼にそんな詳しいの？」

「あーそれはだな」

「それは？」

僕は首を傾げながらキバットの答えを待つ。

「いいか、魔族はファンガイアを含め13種類も存在している。だけど、その中に吸血鬼…つまりヴァンパイア族はもういない」

「もういない？もう」ってことは…」

「ああ。ヴァンパイア族は昔、ファンガイア族によつて滅ぼされたんだ」

「じゃあ、なんで…」

存在しているの？と僕は言いたかった。

「ここからは俺の推測なんだが…ヴァンパイア族は絶滅したんじゃない。絶滅していた事にしたんだ」

「絶滅していた事にした？」

「そう、そしてファンガイアの手が届かないところ…ここに身を隠したんだと思う」

「確かにそう言われてみれば合点がいくかもね…」

「だろ？ヴァンパイア族はそれほど強くない種族だったんだ。元々、人間の血を吸わないと能力を発揮できないし使える能力は一つだ」

「けど、人間たちよりは強いんじゃないの？」

「それは昨日の出来事でもわかるからな。にしても、ファンガイアを探しに来たのにまさかヴァンパイア族と出会うなんてな」

キバツトが呑気にそんなことを言う。確かにヴァンパイア族の存在は僕でも驚きだ。

これはファンガイアだけじゃなくヴァンパイア族にも気を付けないといけなくなる

…

## 居場所・ここでの生活

「今日で退院だね、おめでとう」

入院してから二日経ち、ようやく入院生活とおさらばになる。

「今までありがとうございしました」

頭を下げて診察室から出ていく。

さて、これから住む場所を探そうと思うと、これから長居することになるのだから、それに…

「あれ…?」

僕が病院から出ると見知った人が僕の方を見て立っていた。

「あれ、美羽ちゃん。どうしたの?」

「ちゃん付けはいいわ。」美羽「でいって言ったでしょ?」

「そうだけど…」

あまり呼び捨ては僕には似合わないと思うけど…

「けど、ここで何をしているの?」

それはそれとして僕が一番疑問に思っていることを口に出す。

「アナタを待っていたのよ。あの事件の件で」

「あの事件がどうかしたの？」

「ほら、この都市の秘密を触れてしまったんだもの。どうなったか教えておかないと」

「どうやら美羽ちゃんのお偉いさんが僕の判断を決めたらしい。」

「この事を口外しなければこちらは何もしないって…」

「そう、なら良かった…僕はそのつもりはないし」

「なら、良かったわ…とところでアナタ、これからどうするつもり？」

「少し安堵したような表情をして、こっちの予定を聞いてくる。」

「うくん…とりあえず住める所を探さないとって…」

「住める所…？ホテルじゃないの？」

「ちよつと色々あってね、ここに長居することになったんだ」

「ふくん、なるほど…」

「あまり深入りはしないようでそれ以上は何も聞かなかった。」

「満足した？」

「ええ、けどアナタどうやって探すの？不動産屋の場所もわからないでしょ？」

「あ……」

「確かに言われてみれば僕はここの都市のことをよくわかってない。」

今から探そうとしても迷うだろう。

「そうよね、私が案内してあげてもいいわよ？」

「え、いいの？」

「だって私がああ的事件に巻き込んだんだもの。それに気軽に声をかけられそうなのって私しかないでしょ？」

美羽ちゃんが痛いところを突いてくる。確かに初対面ではなく何度か話したことがある人物は美羽ちゃんと元樹先生だけだ。

「そうだね……お願いするよ」

僕は気を落としながらそう言った。

それを見て美羽ちゃんはクスツ、と笑った気がした。

「じゃあ、付いてきて」

美羽ちゃんが踵を返しどこかへ向かう。僕は言われたとおり後を付いていった。

歩いて数十分、とある不動産屋に着いた。

「渡つてどんな家を望んでるの？」

「なるべく安いところで自分の部屋が広いところがいいかな……？」

当然、そんな場所はあるとは思っていない。ほとんどそんな物件はないだろう。  
「あるとは思わないけど……まあ、聞いておきましょう」

当然、そういう物件がなかった……他の物件は少し悩むところだった。

「うーん……」

僕は思わずしゃがんで頭を抑えた。どうして良いところがないんだろう……

美羽ちゃんは少し離れた場所で誰かと電話しているし……

美羽ちゃんが電話を切るところこっちに戻ってきた。

「ごめんなさい、待たせてしまつて」

「う、うん……気にしなくていいよ。僕の問題だし……それに本来は美羽ちゃ——えっと、美羽は無関係だし」

僕が美羽ちゃんを呼び捨てするのに違和感を覚えるけど、流石に二度目は怒られそう  
な気がしたので呼び方を変える。

「私のことは気にしなくていいわ。私が勝手にやっているから」

「そうだけど……流石に悪い気が……」

「そう?」

「うん……」

僕が頷くと美羽ちゃんが不敵に笑ったようにも見えた。

「じゃあ、お願いがああるのだけれど」

「何、かな……?」

「一杯奢つて頂戴。近くにいい店を知っているわ」

「それぐらいならいいけど……なるべく安いので……」

僕は美羽ちゃんの後について行ってとある店に入った。

中は見えた感じバーと言う感じがする。ただ一つ除けば。

「いらつしやいませ。アレキサンドへようこそ」

ウエイトレス衣装を来た小柄の女性がこつちを見てニッコリと笑い、声をかけた。

「こんばんは、大房さん。席は空いてるかしら」

どうやらこの人は大房さんと言うらしい……けど、店のウエイトレスとしては背が低い

ような……

「あつ、矢来さん。こんばんは」

「今日はいつもみたいにカウンターでいいですか?」

「いえ、今日は連れが一人いるから、テーブルでお願いできる？できればいいのだけ  
ど」

大房さんがこちらをチラツと見てきた。誰かを確認しているのだろう。

「はい、畏まりました」

大房さんに案内され、テーブル席で美羽ちゃんと対面するように向かい合つて座つた。

「珍しいですね、矢来さんが誰かと一緒だなんて」

「ちよつとあつてね」

何やら意味が深そうにそう答えた。

「ご注文はどうしますか？」

「そうですね……私はチャイナブルーを」

「チャイナブルー？」

美羽ちゃんの口から出てきた言葉に僕はよくわかってない。

「ライチリキュールとグレープフルーツジュースにトニツクを適量、ブルーキュラソー  
で綺麗な青色に仕上げたカクテルですね」

カクテルつてまさか……

「それはお酒？」



「はい、お酒ですが……矢来さん、もしかしてこの方は普通の？」

「ええ……彼にはジューズか何かを」

「なるほど、そういう事ですか。わかりました」

そういうと大房さんがカウンターの方へ足を運んで行く。僕はそれを見ながら美羽ちゃんを見た。

「美羽って、見たところ未成年だけどお酒なんて飲んで大丈夫なの？」

「ええ、大丈夫よ」

まるで自信あるかのようにハッキリと答えてきた。

「言い切ったね……」

「吸血鬼はね、アルコールに酔う事ができない。まるで水みたいに受け入れてしまうのよ。他にも煙草や麻薬といった中毒性のある嗜好品も用をなさないわ。全部、無効化してしまうのよ」

ここにきて新事実がわかってしまう。だからお酒を飲んでも大丈夫というわけなんだ……

「お待たせいたしました、 矢来先輩」

僕が美羽ちゃんの話を知っていると、僕達の席に先ほどとは別のウェイトレスがやつ

てきた。

「稲叢さん、こんばんは」

稲叢さんと呼ばれた女性は美羽ちゃんを見た。

「どうやら、美羽ちゃんの知り合いらしく…美羽ちゃんはその常連さんらしい。」

「常連さんなんだね」

まるで恵さんや嶋さんを思い出す。

「事情があるのよ。あと彼女は、学院の後輩だから」

美羽ちゃんは学生らしい。そこで僕はここでもう一つしておくべきことを思い出す。

本土の方でも民生委員から勧告を受けていた。それは高校を卒業することだったはず…ここに長居するならこの都市の学校に入学しなければならない…

「稲叢さん、彼は紅 渡よ」

そんなことを考えていると美羽ちゃんが僕を稲叢さんに紹介した。

「初めまして、稲叢 莉音です」

「は、初めまして……」

初対面の人と話すときやはり緊張し、思わず動揺しながら頭を下げてしまう。

「紅 渡さん……ふふ、もう、矢来先輩ってば、そういうことはちゃんと覚えてくれないと」

「……何のこと？」

莉音さんが僕と美羽ちゃんを見てクスツと笑い何かを察したように言ってくる。

流石にこれは僕も美羽ちゃんもわかってない。

「男の方と二人つきりでデートだなんて……言ってもらえればちゃんとお祝いを用意したんですよ？」

デ、デート……？僕と美羽ちゃんが？

僕達は一切そんなつもりはないのに、どうやら勘違いさせてしまったらしい。

「デートじゃないわよ。彼とはそんな関係じゃないわ」

「そうですよ！ぼ、僕が女の人とデートだなんて……」

少し声を上げて、自然と声が小さくなってしまいなながらも反論する。

「連絡したでしょう？彼が、そうよ」

「あつ、この方がそうなんですか。なるほど」

二人して僕について意味有り気な話をしているが僕はさっぱりわからない。

そして、莉音さんが僕をジロジロと見てくる。

僕は人にじつくり見られるのには慣れておらず、顔を俯かせる。

「稲叢さんはどう思う？」

「んーと……、はい！わたしはいいと思います。悪い人じゃないと思いますから」

その言葉を聞いて、どうやら品定めらしからぬ人定めをされたらしいことが分かった。

「いいの？見た目だけで決めちゃって」

「だって、わたしは矢来先輩の事を信じてますから。だから矢来先輩が大丈夫と思って相談したならわたしも大丈夫だと思います」

余程、美羽ちゃんの事を信用しているらしい。僕はあまり話に割り込んで邪魔だと思つたから、話を聞くだけにした。

「そう。ありがとう、稲叢さん」

「いえ、お礼を言われるようなことにはないです。それよりも、矢来先輩」

「渡は私の恋人ではないけれど何か用？」

「……先輩、つれませんね」

「あのね、本当にデートだとしたら知り合いが働いてる店に来たりしないわ」「わたしに彼氏さんを自慢しに来たのでは？」

「デートではないって言つたはずなんだけど……もしかして勘違いされてる？」

「……稲叢さん、私のことをどういう目で見ているわけ？」

「いえ、別に……」

「そう、ならいいけど……」

美羽ちゃんは何か言いたげに莉音さんを見た。

「それで注文は？」

「あつ、すみません。チャイナブルーのお客様は？」

「私よ」

「こちらがチャイナブルー、こちらがグレープフルーツジュースとなります」

「どうやら僕はグレープフルーツジュースらしい。僕も何かとそちらのほうがいい。お酒は飲まないし。」

「ありがとうございます」

僕はグラスを自分の目の前まで持っていきながら頭を下げる。

「……………」

そんな僕を見て莉音さんがじっと見つめる。何か悪いことをしたのだろうか。

「えっと、どうしたんですか？」

「あ、いえ。あまりこの付近ではお見かけしたことがないので」

「えっと、実は僕……ここに入ってきたばかりなんです」

莉音さんの言葉に苦笑しながらそう答えた。

「ああ、だから……なるほど、そうなんです。今後ともよろしくお願いします」

「えっと、よろしくお願いします」

ペコリ、と頭を下げる。今日だけで何回頭を下げてんだろう…自分でも覚えていないぐらいだ。

「それではごゆつくりどうぞ。あつ、それから矢来先輩。わたしは今回のお話、特に問題ないと思いますから、頑張ってくださいね♪」

今回のお話？なんのことを言っているのだろう…僕自身よくわかってない。

「ありがとう、稲叢さん」

美羽ちゃんのお礼の言葉を聞いて、莉音さんはカウンターの方へと戻る。

「全くあの子は…まあ、いいわ。飲みましょう」

何か少し呆れたように美羽ちゃんは呟いた。

「う、うん…」

僕は美羽ちゃんに促されてグレープフルーツジュースを喉に流し込んだ。

素直に僕の知っているグレープフルーツジュースであったことがなぜか嬉しかった。

「僕、これからどうしよう…色々とやるが増えたし」

少しだけ心の声を漏らしてしまう。いきなり、こんなことが起きてしまえば兄さんに申し訳ない。

それにこんな場所だどつい緩みきってしまう。

「……ねえ、渡。渡は一人暮らしがしたいの？」

「え、僕はできればの話……あまり他人に迷惑をかけたくないし……」

「そう……あの一人暮らしというわけじゃないんだけど……」

美羽ちゃんが少し躊躇ったような口ぶりでこつちをじっと見つめる。

「私と一緒に暮らさない？」

「え？」

思いもよらない言葉が美羽ちゃんの口から発せられてきた。思わず僕の体が硬直した。

「えっと、酔ってる？」

「言ったはずよ、吸血鬼はアルコールに酔うことはない。それに私は大真面目よ」

僕の言葉をキツパリと否定してきた。どうやら美羽ちゃんは本気で言ってるらしい。

「けど、何で急に……」

僕自身、話の流れがよくわかっていない。

「えっと、実家なの？」

「いいえ、部屋を借りているわ。私は渡となら一緒に住んでも構わない、そう思ってるわ

よ」

僕と一緒に……僕は今まで女の子と一緒に住んだことはない。ただ、ちよくちよく僕の家にとある女の子が世話を焼きに来るぐらいだった。

「流石にそれは……」

——と言いつつも僕は来てしまった。

とりあえず見てみる程度には気になった。

見るからに大きい建物だ。普通の一軒家よりは一回り大きく見える。

「えつと、ここが……?」

「ええ、私が住んでいるところよ」

けど、緊張する。それもそうだ、今まで女の子の家になんて一度もお邪魔したことはない。

手に汗を握りながら建物に入っていく美羽ちゃんを追いかける。

ガチャリ、ととある部屋の扉を美羽ちゃんが開ける。

僕は固唾を呑んで部屋に入った美羽ちゃんの後を付いていく。少し長い廊下を歩き、リビングと思わしき扉を開けた。

「ただいま」

「あつ、おかえりー」

美羽ちゃんの帰宅の挨拶に誰かが返事をした。



当然、僕でもキバツトでもない第三者の声。その声はとても可愛らしかった。

「え？」

僕はその声の発生源である一人の小さな女の子を見た。

「いらつしやーい」

恐らく僕の腰辺りだろうか、それぐらいしかない身長少女を見て驚きを隠せない。

「話は聞いてるよ、これからよろしくねー」

えっと、いまいち状況を飲み込めてない。この女の子は何か僕のことを知っているよ  
うな言い方で話してくる。

「え？」

僕はもう一度首を傾げた。

「あれ？美羽ちゃん？例の人じゃないの？」

僕の反応に流石に女の子も疑問を浮かべた。

「いいえ、合っているわ。彼が紹介したかった、新たな入寮者よ」

新たな入寮者……？いまいち理解ができなくて、頭が痛くなりそうだ。

「えっと、どういうこと？」

「だから言ったでしょ？私と一緒に暮らさないかって」

「確かに言ったけど、この子は？」

今にも視界から外れそうな小さな女の子を見て僕はそう言った。

「布良さんのこと？ここの寮長よ」

「寮長……つまりここは寮？」

「そう。ここは、私が通っている月長学院の寮なのよ」

学院と言うことは学院が設立した寮なんだ……少し僕は安心する。

「美羽が言っていた一緒に暮らすというのは、この寮で生活するということ？」

「ええ、そうよ。他にどんな意味があったと？まったく一体何を勘違いしていたのかしら」

美羽ちゃんが僕を見ながら苦笑する。さすがに勘違いしていた僕は何も言えず目を逸らした。

「それでどうするの、渡？ここならアナタでも暮らす事ができるわよ？」

確かにそうかもしれない。ホテルで生活するよりこっちの方が安いし。それにここが学院の寮ならチャンスだ。

だけど、僕が気になる点が三つあった。

「えっと、そもそも僕は男だし。第一学院に通っていない人がここに住むわけには……」

「あれ？紅君、編入しないの？学院に通わないの？」

小さな女の子、布良さんはなぜか学院に通う前提で僕に話しかけてくる。

なぜ、そういう前提で話しかけられているかはわからないけど、個人的にはありがたかった。

「えつと、卒業しておきたいから、できれば編入したいんだけど……」

「だったら大丈夫よ。まあ、吸血鬼が通えるのは月長学院だけだけど普通の人間でも一応、通えるから」

その言い方だとその学院に吸血鬼がたくさんいるらしいけど……

「それに性別の事は気にしないわ。嫌なら最初から誘ったりしない」

「性別に関しては若干気になるけど……まあ、事情を考えると仕方ない部分もあるからそれに、プライバシーはちゃんと守れるしね、この寮」

「各部屋に鍵はもちろん、トイレ・バス、小さいけれど冷蔵庫も付いているわ。さすがにキッチンはこの部屋にしかないけれど」

いや、それでも十分に広いと思うけど……

「元々、宿泊施設として作られた建物なんだよ、ここ。でも人気がなかったみたいで。結局学院が買い取って寮にしたんだって」

なるほど……だから建物自体もそれほど大きいんだ。

「だから、その気になれば他の人とあまり接触しないことも可能なのよ」

「他にもこの寮で暮らしている子はいるけど、ちゃんと確認済みだよ。とりあえず、みんな

な暫定的に了解はくれたよ」

いつの間にそんな確認をしたんだろう…

「暫定的に？」

「んー、実際に会ってみて、あまり変な人だったらNGだって。でも、私は大丈夫」

「NGが出るほど変な人じゃなさそうだし、他の人も多分NGを出さないと思うよ」

そうだといいいんだけど、僕って生活が他の人と比べると変なだけ…いや、自分で変と言うのもあれだけど実際、世話を焼いてもらっている子にそう言われてるし。

「他の住人にはさつき店で会った、稲叢さんもいるわ」

あの莉音さんもこの住人だったんだ。

「改めて自己紹介させてもらうね」

そんなことを思っていると布良さんが口を開いた。

「私は布良 梓って言います。今後ともよろしくね」

「あ、はい。僕は紅 渡です。よろしくお願ひします」

ペコリと頭を下げてこちらにも布良さんに名乗った。

「ちなみに私は美羽ちゃんと同じ風紀班に所属しているんだよ。だからね、紅君の事も聞いているよ」

風紀班…つまり布良さんも美羽ちゃんと同じ組織に入っているということらしい。

「そう、なんだ……」

「あ、けど安心して私も紅君と同じ人間だから。困ったことがあったら相談してね」

その言葉が少しだけ心に刺さった。少し騙しているようで罪悪感を感じてしまう。

「渡、言っておくけど彼女は私と同一歳よ」

そんな僕の考えを気にせず美羽ちゃんが予想外な事実を口にした。

「どうやら、人は見かけによらないらしい……」

「それで渡、アナタはどうするの？ここで私達と暮らす？」

実に悩む事を美羽ちゃんが聞いてきた。確かに設備は文句がないほど完璧だ。それに個人の部屋も付いてくる。

けど、少し問題なのは女性もいるということ。そこは時間をかけて接していれば問題ないし、僕が変なことをしなければ問題ない。

良いかもしれない、だけど僕の中では最大の重要な事を聞いていない。

「その個人の部屋って防音対策ってされてるの？」

僕の質問に二人はキョトン、と首を傾げた。

なぜ、こういう質問をしたのかわかってないらしい。

「一応、されているけどそれがどうかしたの？」

「まさか渡、部屋で変なことをしようとしているんじゃないでしょうね」

「べ、別にそんなことはないよ！ただ気になったただけだから!!」

なぜか美羽ちゃんに変な勘違いをされていたので慌てて誤解を解こうとする。「それなら、いいけど……どうするの?」

なぜかまだ半信半疑な目をこちらに向けてながら答えを待つ美羽ちゃん。

「えつと、それじゃあ世話になってもいい?」

「うん、もちろんだよ！よろしくね」

「ええ、よろしく」

二人は受け入れてくれて少し安心した。

「他の住人は?できれば早めに挨拶しておきたいけど……」

「この時間に、誰かいるかしら?みんな、仕事を抱えているから」

「そうだねー。まだ深夜の2時だし、絶賛営業中じゃないかな」

こんな時間になっても仕事って一体、どんな人たちなんだろう?

「あー、でも、エリナちゃんは今日はお休みだったような」

「なら、部屋にいるかもしれないわね」

「そうだね。とりあえず確認しにいかうか」

「悪いけど、渡はここにいてもらえる?」

「うん……」

僕は特に何も言わず頷いた。その言葉を聞いて二人は部屋を出ていった。「にしても大丈夫か、渡ー？」

懐にいたキバットが心配そうに、そして少し面白そうにそう聞いてきた。

「どう、かな……けど、なんとか上手くやっていけそうな気はするよ」

「それならいいんだけどなー」

「それってどういう意味？」

「さあな……おつと誰か来たみたいだぜ」

その言葉と同時にキバットは再び息を潜めた。

ガチャリ、とある一室の扉が開いた。

「はあー、いいお湯だったー」

美羽ちゃんや布良さんでもない長い銀髪の少女が、服を着ずに体にバスタオルを巻いてリビングに入ってきた。

世間で言うバスタオル一枚、という恰好だった。

「!？」

さすがにこれは見てはいけないと素直に判断し、僕はその少女に背を向けた。

「あり?えーつと……」

何か疑問に思ったのか……いや、疑問に思うところがあるんだろう。

「え、えっと……その僕は何も見てませんから」

少し情けないと思うけど、これでも精一杯の弁明だ。

「あの、僕……紅 渡つて言うんですけど。今日からこの寮にお世話になることになりました、えっと……」

相手の顔を見ずに話すのは申し訳ないけど、さすがにこのまま振り返るのはまずい。「クレナイ ワタル……？あー、思い出した、ミューがそんなこと言ってたね。寮に人を増やしているのかどうかって」

話は聞いているのならありがたかった。けど、この状況どうしよう…

「あり？ミューの紹介じゃないの？ヤライ ミュー」

「あ、合ってるよ。美羽ちゃんを紹介でここに来たんだ」

なぜか危機感を持たない少女ではあるが、僕としては危機感を持ってもらいたかった。

「あ、やつぱり。ワタシはエリナ・オレゴヴナ・アヴェーンって言うの」

エリナ・オレゴヴナ・アヴェーン……名前からわかるようにどうやら外国人らしい。

「エリナも吸血鬼だよ、よろしくね、ワタル。えっと、ワタルはこの発音であつてる？」

「う、うん、合ってるよ」

若干、発音が違う気がするがあまり気にするような差ではなかった。



「ワタシのことはエリナって呼んで。エリナもワタルのことはワタルって呼ぶから。いいよね？」

「勿論、構わないよ」

少し他人を呼び捨てするのはあまり気が気じゃないけど…

「エリナちゃ——エリナはお風呂上がりなの？」

「うん、お風呂上がり肌を晒しながらアイスを食べるって最高だと思うから」

そういうものなんだ…

「というか、ワタル、ツツコミ遅くない？早いだけの男はダメだけど、遅いのもどうかと思おうよ？」

いや、僕ってそういうボケやツツコミとか得意ってわけじゃないけど…

「あとね、ちよつと確かめておきたくて」

「えつと、何を？」

「ワタルが女の子だらけのこの寮に入ってダイジョーブかどうか。そこをちゃんと見極めた方がいいかなって」

「偶然、こんなシチュエーションになったから、ついでにと思つて」

ついでについて…：こういう考えをしたらそうなるのか僕にはわからなかった。

「ワタルは合格。至って普通だったからね」

僕にとって普通はよくわからないけどOKをもらえて安心した。

「えっと……服は着ないの？」

「えーだって髪が乾く前に着ると、服が濡れちゃうよ。ワタシ髪が長いから、ある程度乾かして着ないと」

髪が長いって大変なんだな、と僕はそう思う。

「二人して何やってるの？」

いつの間にか入ってきたかわからないけど美羽ちゃんの声が聞こえた。

「ちよつと、訳あって……」

「ふくん、どういう訳？」

「こ、ここで二人を待っていたらその姿のエリナが入ってきたから見ないように背を向けたんだけど……」

「そう、ならいいけど……」

「とりあえずエリナちゃんは服を着てきて、これは寮長命令」

「はーい。それじゃあワタル、またあとでねー」

後方で扉を開閉する音が聞こえて、ようやく僕の肩の荷が降りた。

「とりあえず何もなかったようで安心したわ」

美羽ちゃんが僕の目を見てそう言ってきた。

「やっと一段落つけるな」

僕は部屋の鍵を布良さんからもらって直ぐにその部屋を開けた。

鍵を締めると同時にキバツトが僕の懐から飛び出してきた。

「そうだね、とりあえず出すものは出そうか」

今まで背負っていた大きな荷物であるバイオリンケースを床に置いて、中身の安全を確認する。

ブラッディ・ローズ……父さんが作ったバイオリンで、幻のバイオリンとも言われるほど凄いものだ。

かつてこのバイオリンを一億円で売ってくれとも言った人がいたが、これは大事な父さんの形見のようなもの、当然売るわけがなかった。

僕は父さんのバイオリンを超えるようなバイオリンをこの手で作りたい、そう思っている。

未だに父さんのバイオリンを超えるようなバイオリンはできていないけど、母さんに教えてもらいながら作っている。

「いつか、父さんを超えないと……」

自分の意思を確かめるように呟く。

けど、今はそれよりもこの仕事を頑張らないと。

これから先は長くなりそうだ。

## 入門・学園編入

「ん……」

僕は無意識に目を覚ました。ベッドから体を起こし僕は部屋を出る。

「おはよう、渡」

リビングから出ると何かが焼けている匂いと美羽ちゃんの声が聞こえてくる。

「お、おはようございます……」

「敬語なんて使わなくていいのに。というか渡、せめて顔を洗って、服を着替えてきなさい」

「うん……まあ僕、寝巻き姿のまま部屋を出てきたんだ……僕は慌てて部屋に戻り顔を洗う。」

「うん……まだいつもの癖が残ってるのかも。気を付けなさい」

「そう思いながらも服を着替え再びリビングに戻った。」

「トーストも焼けているわよ」

「え、いいの?」

「ええ、手間がかからないもの」

「じゃあ、お言葉に甘えて……」

そう思いながらも僕は少しだけカーテンを開けて窓の外を見た。

いつの間にか外は太陽が沈む時間となっており、どうやら僕が起きたのは夕方らしい。

「いつの間にか生活が昼夜逆転してる……」

僕的にはあまり生活に支障はきたさないから大丈夫だけど、何か納得がいかない。

「はい」

美羽ちゃんがテーブルにパンを置いた。どうやら食べれるらしい。

バターを塗られた焼けた食パンがいい匂いを漂わせる。

「あつ、おはようございます。矢来先輩、紅さん。いえ、紅さんも学院に通うんですから、

これからは紅先輩と呼ぶべきですよね？」

どうやら莉音さんが起きたらしくリビングに顔を出してきた。

「僕としてはどう呼ばれても気にしないよ」

「あれ、紅先輩、ご自分で夕食を用意したんですか？」

と、莉音さんが机の上の食パンらを見てそう聞いてきた。

「僕じゃなくて美羽が用意してくれたんだ」

「おはよう、稲叢さん」

僕は横目で美羽ちゃんを見た。

「作ったというほどではないわ。ただ食パンを焼いただけなもの」

「矢来先輩が？あの……わたしの料理に何か問題がありましたか？」

何かに震える莉音さんが美羽ちゃんにそう聞いた。

「そういうことではないわ。突然渡が増えたから、念のために私が用意しておこうと思っただけ。ただそれだけよ」

「えつと……何かごめんね？」

なんか余計な気を遣わせたようで少し申し訳なく思ってしまう。

「そうですか、安心しました。それでは明日からいつも通り、わたしが作るということでもいいんでしょうか？」

どうやら、今の言葉を聞く限りいつもは莉音さんがみんなの分を作っているようだ。

「ええ、お願いするわ」

「それじゃあ、明日からわたしが夕食の準備をさせてもらいますね、紅先輩」

「それはありがたいけど、僕の分までいいの？」

「いえいえ、全然大丈夫です。いつも皆さんの分も作っていますから簡単なものしか作れませんけど、紅先輩さえよければ」

「それなら、お言葉に甘えて……よろしくお願いします」

いつもの癖で僕はペコリと頭を下げる。

「はい、畏まりました」

「さてと、それじゃあみんなの分の夕食を作っちゃおう」

莉音さんは笑顔でそう言って台所の方に足を運んだ。

「おはよう」

「おはよー」

僕が莉音さんを目で追っていると布良さんとエリナちゃんがりビングに来た。

「おはようございます」

思わず敬語で挨拶をしてしまう。

「おはよう」

「おはようございます、もうすぐできますから待ってて下さいね」

それにしてもこんな時間におはようって何か違うような…いや、けど吸血鬼なら当たり前なのだろうか？

「やあ、諸君、おはようっ」

そんなことを思っていると聞いたことのない声が耳に入った。

「今宵の月も美しい、いい夜だね」

少しカッコよさそうなセリフを言いながら金髪の男性？が黒いマントをヒラヒラさ



せながらこちらに歩み寄ってきた。

「どこことなく吸血鬼らしい格好をしていた。

「うん、おはよー」

「おはようございます、ご飯できてますよ、ニコラ先輩」

「おはよう」

「おはよう。つて、もー、部屋の中でマントをパサパサしないの。埃がたつでしょ」

エリナちゃん、莉音さん、美羽ちゃん、布良さんの順番でその人に挨拶を返した。

「マントではない、漆黒の衣だ」

「はいはい、ヴェールねヴェール。いいから席について」

少し扱いが雑にも見えるような感じがするが気のせいなんだろうか？

「布良先輩、その前に紅先輩を紹介した方が」

「あ、そうだった。ナイス、莉音ちゃん」

布良さんがそう言つて僕の方を見てきた。それに釣られて金髪の人が同じくこちらを向いた。

「えーつと、新しくこの寮で暮らす紅 渡君。話はちゃんと聞いてるよね？」

「えつと、紅 渡です……よろしくお願ひします」

ペコリと頭を下げて金髪の人に名乗った。

「ああ。我が名はニコラ・ケフェウス、闇の住人だ」

「えつと……どういう意味？」

ニコラさんには申し訳ないんだけど言ってる意味がほとんどわからなかった。

「要は『ボクはニコラ・ケフェウス、吸血鬼だ』って言ってるだけだよ」

言ってるだけ……それだけでも僕には難解なんだけど……

「同じ住人として、共に覇道を進むとしよう。君にはボクの真名を呼ぶことを許可しよう」

えつと……真名……？

「『同じ寮に住んでるんだから、仲良くしようね。ニコラって呼んでくれても構わないよ』だって」

うん……全然そういう風には聞こえなかった気が……

「僕も仲良くしてくれると助かります」

少し翻訳がないと心もたないかもしれないけど悪い人ではない、それはわかる。

それなりに良い人たちばかりなんだろうけど少し濃い人達だ、と思ってしまう。

「そういうえば美羽……」

「ん、何かしら？」

「なるべく早めに学院に編入しておきたいんだけど……」

「今から電話をしておけば大丈夫だと思っけど……」

今から電話をすれば編入できる学校って凄いな気がするけど……

美羽ちゃんが携帯を取り出し誰かと電話を始めた。

暫くして美羽ちゃんが携帯を閉じこちらを見た。

「渡、明日からなら編入しても問題ないそうよ」

「あ、ありがとう」

ということは今日はやることはないようだ……少しこちらへんを探索しようかな。

僕はそう思いながらも食パンを食べ始める。

特にこれといったこともなくその日が終わった。なんていうか何をやればいいのかわからないものなんだな、と思ってしまう。

そういえば働く所もちゃんと決めておかないと……

「う〜ん……どうしよう」

「どうかしたの？渡」

美羽ちゃんが僕を気にかけるように声をかけてきた。

「いや、ちよつとね……働くところを探してるんだけど……」

「ああ、なるほどね……渡は人間だからどこでも働けると思うんだけど」

「その言い方だと吸血鬼はある程度決められているの？」

「まあ、そういうことになるわね。それでどういう仕事をしたいの？」

「どうい……僕としてはそういうのは決めていなかった。」

ただ、僕がここにいるのは悪さをするファンガイアを見つけて倒すこと……けど、今のままじゃあファンガイアを見つければ警察関係とかそういうところなんだろう……

きつかけがあるとすれば警察関係とかそういうところなんだろう……

「美羽の働いてる風紀班ってどんな仕事なの？」

「なに、渡……風紀班に入りたいわけ？」

少し意外そうな顔をしながら僕を見てきた。

「いや、入りたいっていうより気になったんだけど……」

「まあ、入れないこともないけど危険よ？あれは吸血鬼に対抗するための治安維持活動を自発的な住人を募って立ち上げられた警察とは別の組織なのよ」

「そう、なんだ……」

「雇用じゃなく、ボランティアの形で誤魔化してるけど……そんなところに入ろうと考えるなんて正気？」

美羽ちゃんが僕を真剣な眼差しで見つめて問いかけてくる。

「……大丈夫、腕には自身がある」

勿論、これは嘘ではない。今まで数々のファンガイアと戦ってきたし、それがたとえ生身じゃなくともそれなりの戦い方は身体が覚えている……

それでも力勝負だと負けてしまうかもしれないけど実践の経験は並ではない、と僕は自負している。

「……そう、アナタがそう言うなら止めはしないけど知らないわよ？」

「うん、大丈夫……」

風紀班……つまり対吸血鬼の組織であり、それはどこか「素晴らしき青空の会」にも似ているような気がした。

けど、これでファンガイアを見つけられるきっかけができた。悪さをすれば恐らく警察や風紀班と言った治安維持活動をしている組織に耳が入ると言うことにもなる。

「はあ、わかったわ。主任チーフに伝えておくわ」

「ありがとう」

美羽ちゃん達を騙しているようで申し訳ないと思うけど、これでも人間とファンガイアのためでもある……そう自分に言い聞かせた。

私立月長学院と呼ばれる学校の前に僕は思わず緊張してしまっている。

僕は学院や学校といった教育施設に一度も入ったことはない。僕はずっと家の中で暮らしていた。

だからこうも人と接する機会が多い場所はあまり慣れていないんだ。

それにしても夜に通う学校って変わってるな……僕が聞いた話だと学校っていうのは朝一番から勉強に励む場所だと聞いたんだけど……なんでもここは吸血鬼が通うための学院らしく人間が通うのはごく稀らしい。

「……以外も教育施設はあるの？」

美羽ちゃんに渡された学生服に違和感を感じながら疑問を口にした。

「えっとね、あるにはあるけど、そこは普通の人用。お昼に授業を行うところばかりだね」

お昼に、なんだ……にしても僕も何か魔族らしい時間に起きるようになってきちゃったし……確かにここの学院も悪くないかもしれない。

「それじゃあエリナちゃん、わたしたちは教室に行こうか」

「うん。それじゃあワタル、また寮だね」

「うん、また」

「失礼します」

去り際に失礼しますって言う子は初めて見るな、と思いつつも布良さん達を見た。

「それじゃあ、教室に行こうか」

「いえ、渡は編入だからどちらかというど職員室が先じゃないかしら？」

教室や職員室、どちらが先……って言われても僕にはよくわからなかった。

「ボクが職員室まで一緒に行こうか？」

ニコラ君がそう提案してくる。僕としてはどこにあるかもわかってないので嬉しかった。

「布良に矢来、こんなところで何をしているんだ？早く中に入れ」

学院の門の前で話していると、とある男性が話しかけてきた。どこかで聞いたことのある声でもあったし、見たこともある顔であった。

「あ、主任、丁度よかったです。紹介したい人がいますよ」

「なんだ、女でも紹介してくれるのか？悪いが乳臭いガキには興味がないぞ」

と、冗談なのかわからない台詞を言いながら鼻で笑っている。

「残念ながら、紹介するのはこっちにいる男の子です」

「野郎かよ……」

残念がる顔をしながらこつちを見た……どうやらさっきの発言は本気で言っていたようだった……

「あの、貴方は誘拐事件のときの？」

「そういえばこの人……クライアントの役をやっていた人だ……」

「ん？ああ、お前はあの時に事件に巻き込まれた奴か」

「紅 渡君です。私たちと同じ学年ですから主任が担当ですね」

「学院では先生と呼べ」

「あい・さー」

「この人の仕事って風紀班の仕事だと思っただけだけどなぜ教師の仕事を？」

「えつと……なぜ教師を？」

「これも風紀班の仕事の一環だ」

「風紀班の？特に関係はないと思うんだけど……」

「実は——隠しているわけじゃないんだけど、私や先生はね、この学院の監視やお仕事があるんだよ」

「監視……？」

「ほら、体裁を整える必要があるから。吸血鬼さんたちを放置します、っていう状態は偉い人たちが嫌うから」



「それで、陰陽局の人間がちゃんと監視をしている、というポーズをとっているのよ」  
「この学院には陰陽局の人間が沢山いる。学生側にもなり布良も監視役の頭数に入っている」

「吸血鬼が通える学院がここだけなのは、それが理由さ」

「人手が余っているわけじゃないからな。他を開放するには頭数が足りん」

人と吸血鬼の共存はそう上手くもいかない、ということなんだ……それは僕たちも十分承知している…

「でね、この人が柘形 兵馬さん。私や美羽ちゃんと同じ風紀班に所属してる…上司なんだ、一応」

「一応上司の柘形だ。ちなみにこの学院では教師をしている。と言っても監視役だから具体的な教科は持っていない」

「紅 渡です……よろしくお願いします」

僕は頭を下げてお互いの自己紹介を済ませた。

「それじゃあまずは職員室に行くか。手続きが残ってるからな、ほら行くぞ」

僕は柘形さんにそう言われてそのまま後を付いていった。

「お前らに編入生を紹介する、ほら自己紹介しろ」

うう……本当に緊張するな……

「く、紅 渡です……よ、よろしくお願いします」

大丈夫かな？と思いつつもみんなの様子を見た。

ほとんどの人がそれだけ？といった感じで僕を見てきた……これほど視線が痛いと感じたのは初めてかもしれない。

「あー、連絡事項については以上、これで始業式は終わりだ」

そう、どうやら今日は学期の始めということらしく、その始業式というものだけで今日は終わりらしい。

「わかっていると思うが明日から授業だ。遅刻するなよ、それじゃ解散」

柘形さんがそう告げると、教室にいる学生が喋り始める。

「えつと……」

「おい、紅」

そのまま帰ろうかと立とうとしたとき柘形さんに呼び止められる。

「は、はい？」

「お前は確か風紀班で働く手続きをしていたな」

「は、はい……しました」

「あまり、こういうのは言いたくないがなぜ他のところになかったんだ？ここよりもっと別の場所があつただろ？」

「そうですね……」

確かにそうかもしれない……けど、僕としてはこういうところに入っていたほうがフアンガイアに近づきやすい。

「まあ、そこはいいが……危険な仕事だとわかっているのか？」

「……はい、わかっています」

生身だったら尚更危険かもしれない、けどこれは人間とフアンガイアの共存の一步かもしれないんだ……引き返すわけにもいかなかった。

「………わかった。まあ、布良か矢来がいれば、十分か」

「よし。お前、今日から出勤しろ」

「今日から……ですか？」

「働きたいんだろ？それなら手が空いてるうちから働いてもらわないと困る。さつきも言ったがウチは頭数が足りないからな」

「そうですね……」

「安心しろ、別に一人前に働く事を期待しているわけじゃない。だが、習うより慣れろ

「という言葉があるぐらいだ」

枅形さんの言うことには一理ある。

「本当に風紀班でやっていくつもりならとりあえず出勤しておけ」

「わかりました」

僕は首を縦に振り頷いた。

「ああ、それからこの資料には目を通しておけ。風紀班の仕事で必要になる知識だ」

枅形さんが僕に分厚い本を渡してきた。

「えつと……今から全部ですか？」

「今日中には言わんが、近日中にな。あと、ある程度の訓練も受けてもらうことになる。いずれ確認試験もあるから真面目にな」

うっ……大変そうだ……それほど簡単な仕事じゃないからかな。

「それと並行して、実務を覚えていけ。まっ……仮採用つてところだ。しばらく見て問題もなく確認試験に合格すれば本採用になる」

「本採用にならなかつた場合は……？」

「他の仕事を幹旋することになるだろうな……とにかくウチでやっていくならその資料は覚えろ、いいな？」

枅形さんはそう言って教室を出ていった……うくん、上手くやっていけるかな。

「どうかしたの、紅君」

「えつと：今日から風紀班に出勤することになったんだけど」

「え、急だね。そんな連絡受けてなかったのに」

「習うより慣れろ、つて：」

「あー、確かにあの人なら言いそうかも」

「だから一緒に支部だっけ？付いてつて大丈夫？」

「うん、もちろんだよ。それじゃあ早速行こうか。つと、その前に美羽ちゃんにも」

「なんとか風紀班で働く事はできたけど、ファンガイアの情報も集めないといけないし大変だな……：そういえばこの都市ではファンガイアの知名度つてどうなんだろう……：下手に誰かに聞くことなんてできないし。」

## 変身・仮面の戦士

美羽ちゃんと布良さんの後を付いていきとある場所へと向かった。

警察署と似て非なる場所で部屋の雰囲気もそこはかとなく似ていた。

「あら、似合ってるじゃない」

美羽ちゃんが僕の服装を見てそう言った。

僕の服装は普通の警察の服といったものじゃなく、どこかの軍服みたいな格好だった。

「そう、かな……?」

あまりこういうのを着たことがない僕としては好きではないけれどこれが風紀班の服らしい…

「けど、美羽だつて似合ってるよ」

着こなしているかのように軍服がとてもお似合いだった。

「あつ、2人とも着替えるの早いね」

そう言つてこつちに駆け寄つてきたのは、ヒラヒラとした服を着た布良さんだった。

「そう……?それより、布良さんのその格好は……それになんでこんな格好を」

僕は自分の服を見ながらそう言った。

「ここは観光都市でしょう？だから、こうしてコスプレ的な制服であまり物騒な感じを出さないようにしているのよ」

確かにこういう格好って何かしらのイベントでよく着られているというのを何度か耳にしたことがある…

「まあ、治安維持のために多少の威圧感が必要だからこれにされたのだけど」

確かにこういうのならあまり騒ぎというものがないようにも思える…

「えっと、じゃあ布良さんは……？」

「そうだよね、そこは私も凄い気になるんだけどサイズがないんだよね」

「作ってもらえないの？」

有り体な疑問を布良さんに問いかけた。

「あとね、上の人の命令なんだよね。本当に変な命令でしょう？」

上の……？？どんな意味があるんだろう…

僕は命令の意図がわからず首を傾げた。

「あのね、渡。こう言っては失礼だと思うのだけれど……彼女、軍服が似合うと思う？」

その僕を見て美羽ちゃんが僕に耳打ちでそう言ってきた。

確かにあまりそれらしくないっていう感じはするけど。

「少し見てみたい気持ちはあるかも」

「渡、どういう感覚をしているのよ。言っておくけど布良さんの服装、上にその手の趣向を持つている人がいるらしくて、彼女に巫女服を着るように命令したの」

「どうやら布良さんの服装は巫女服というらしく、この服装は上の人の趣味でもあるらしい……」

「その方が萌える。観光に来たお客さんも喜ぶつて、ちよつとしたマスコットの扱いかしら？」

「燃える……？ 布良さんが？」

「……はあ、まあいいわ」

何かを諦めたかのように半眼でジツと僕を睨みつけてきた美羽ちゃん……何か間違えたのだろうか？

僕は布良さんを見た。ヒラヒラとした長い袖や長いスカートは僕的には動きにくそうにも見えた。

「どうかしたの、紅君？」

「な、なんでもないよ」

けど、布良さん本人はそんな様子を見せていない。それほどこの服は慣れてるんだらう……自分でそう思い聞かせた。



「よし、揃ってるみたいだな」

と、そこで枡形さんがやってきた。枡形さんも学院の時に着ていたスーツ？らしきものではなくどうやら風紀班では軍服を着ているようだ。

「遅いですよ、主任」

「こつちはお前と違つて、色々大人の仕事があるんだ」

枡形さんが布良さんを見た後、僕を見て口を開いた。

「さて、紅 渡。この支部では俺が主任で、お前は俺の下につくことになっている」

「よ、よろしくお願いします……」

「風紀班の仕事はその名の通り、この海上都市における風紀の取り締まりだ」

「今日からお前にも仕事をしてもらう。欠かすことのできない非常に重要な仕事だ、いいか?」

一体、どんな仕事なんだろう……真剣な表情で話す枡形さんを見て僕は頷いた。

「その仕事は……」

「巡回だ」

「巡回……ですか?」

「ああ、そうだ。まずお前にはこの都市を見回りしてもらう。その風紀班の制服を着て、街中をうろつくだけでいい」

巡回……確かにこれも必要な仕事なんだろう。

「新人が仕事を覚えるには丁度いい内容だろうか？」

柘形さんの言葉に僕は素直に納得してしまう。

「犯罪を未然に防ぐためには、巡回は欠かせない重要な仕事だが心配するな、一人で行って来いと言わん。教育係が必要だからな」

確かに一人で行っても、僕が下手にやらかしてしまえば風紀班の顔に泥を塗るかもしれない。

「しかし……かといって、新人の教育に二人はもったいない。お前、矢来と布良だと、どっちと一緒に仕事をしたい？」

柘形さんがそう聞いてきた……美羽ちゃんと布良さん……非常に難しい選択肢を与えられた。

「え、えつと……」

「とにかく片方を選べ」

これは迷っている暇もなさそう……僕は意を決した。

「じゃあ、美羽で……ここにきて一番長い付き合いなので……と言っても布良さんと一日しか変わらないですけど……」

「ん、わかった。おい、矢来、お前もそれで問題ないな？」

「私は問題ありません」

「それじゃあ、あとのことは任せる。いつものルートを回りながら適当に説明してやれ。行くぞ、布良」

「あい・さー！それじゃあ、紅君、頑張つてね」

「うん、ありがとう」

僕がそう言うのと枡形さんに続いて布良さんも部屋を去っていった。

「それじゃ、私たちも行きましょうか、渡」

「うん」

僕は美羽ちゃんを追いかけるように後を付いていった。

公園を通つていき、ある程度道路を歩くと商店街まで来た。

「特にこれといった感じはないね……」

「これでも観光地だもの。歩いているだけで事件が起こるほど治安が悪いと、観光客が来ないわよ」

僕がここに来て早くも歩いているだけで事件が起こった様な気がしたんだけど……

そこは口にしなかった。

「おいっ、こちらあ兄ちゃん。人にぶつかっておいで謝りもしねえとはどういうつもりだ」  
「ぶつかってきたのはそっちだろう？」

そんな事を思っていると、どこからか酔っ払いの喧嘩が聞こえてくる。

酔っ払った声と若々しい男性の声……

「アレって止めにいかなくていいの？」

「止めるに決まってるでしょう。という事で私は酔っ払いの相手をするから若い方は任せていい？」

「う、うん……」

僕に人を止めることができるかわからないけど、これも仕事の一つ……こなさないと。  
「えっと、落ち着いてください」

と、僕は若い男性の前に立ち、落ち着かせるように近づいた。

「なんだア？てめエ……」

「いいから関係ない奴は引っ込んでろ」

「そうだ、お前らは関係ない」

そう言つて酔っ払いの男が若い男性の体を突き飛ばした。

手に持っていた荷物を落とし、男性は顔を歪めた。

「なにすんだ、こらあつ！」

「だから、落ち着いてください！」

「うるせえなっ！いいからすつ込んでろ！」

怒りに身を任せて僕の声を聞いていない……う、どうしよう……

「そういうわけにもいかないの。ほら、離れなさい」

そこで美羽ちゃんも止めに入ってくれた。

「なんだ、特区管理事務局の連中か」

と、酔っ払いの男性が美羽ちゃんの服装を見てそう口にした。

「はい、風紀班の者です」

「——ッ」

その言葉を聞いた男性が額に汗をかきながらさらに顔を歪めた。

「揉め事は困ります。落ち着いてください」

「うるせえな、集まってくんよ、うざったい」

「それなら集めるようなことをしないで欲しいのだけれど」

美羽ちゃんが酔っ払いの対応をし始める……僕は僕で若い男性の方を向いた。

「お、俺は別に何もしていない。そっちのオヤジがぶつかってきただけだ」

「この若い男性はあの酔っ払いの男性とは違ってどうやら素面らしい。」

「ここには、その……人と待ち合わせをしていて」

「なるほど……それならここを立ち去った方がいいですよ？」

これ以上の揉め事はされても僕としても対応が困るだろうし、美羽ちゃんの手を煩わせてしまう……僕は男性にここを立ち去るように促した。

「わ、わかった。こつちだつて好きで酔っ払いを相手にしたいなんて思わないからな」

どこか慌てた様子で喋る男性、何かあるのだろうか？

「よろしくお願いします」

「ああ」

男性は短くそう告げると荷物を拾ってアッサリと引き下がっていった。

「これでこつちは大丈夫——ん？」

僕の足元に何か落ちていた。拾ってよく見ると何か小さな袋……多分、先程の男性の持ち物なんだろう。

「あ、あの……つてあれ？」

立ち去ってから数秒なのに男性の姿が見えなくなつてしまった。よつぽど早足でここを立ち去つたんだろう……

「うくん……まあ、これは美羽に渡しておこう」

「なあなあ、嬢ちゃん。よく見りや可愛い顔してるじゃないか」

僕が美羽ちゃんの方に近寄ると、酔っ払いの男性がまるで僕の父さんみたいにナンパをしていた。

「それはどうも。ほら、喧嘩相手もいなくなりましたよ」

「せっかくの気分が台無しなんだ。これから飲み直そうと思ってるんだがどうだ？一緒に飲まないか？」

けど、こう言つては酔っ払いの男性に申し訳ないけどまだ僕の父さんの方が上手く見える……自慢でも何でもないけど……

自慢することでもないし……

「お誘いはありがたいのですが仕事中ですから。お断りさせて下さい」

「つれないことを言うなよー。オジさんの奢りだよ？それにもしてお金に困ってるんだつたら、その先だつて——」

これは止めたほうが良さそうかも……言つてることはよくわからない部分もあるけど、これ以上は美羽ちゃんも嫌がつてる。

「あの、そこまでにしてください」

僕が二人の間に割り込んで酔っ払いの男性を止めに入る。

「なんだ、邪魔すんのか？」

酔っ払いの男性が僕を睨みつけてくる。

「あ、あの僕たちは風紀班です。アナタが何を言ってるのか自分でもわかってるんですか？」

そんな言葉を言いながら酔っ払いの男性に忠告した。

「お、おい、本気になるなよ。ちよつとした冗談じゃねーか」

風紀班という単語を聞いて酔っ払いの男性の顔が青ざめる……どうやらさつきまで僕達が風紀班だということを忘れていたらしい。

「わかつたわかつた。もう行く、それでいいだろう？ つたく……これだから冗談の通じない奴は」

そう文句を呟きながら店の中へ入っていく男性。

世の中、大変なんだな……と僕は思わずそう考えてしまう。

「大丈夫？」

「……ええ、平気よ。あの程度の酔っ払いは、慣れてるから。中にもつとひどい酔い方をする人だっているもの」

「そうなんだ……」

確かにこういう仕事をやっているとこういう事は必ず一度は経験するものなんだろう。

「あれぐらいでいちいち腹を立てていたらこの風紀班はやっていけないわ。相手が酔っ



払いなら渡もあまり真面目に取り合わない方がいいわよ」

「わかった……」

「でも……ありがとう、渡。その優しさには感謝してる」

「う、うん……」

どう返したらいいか分からず変な返し方をしてしまった。

「それで渡の方はどう？ちゃんと問題なく治まった？」

「まあ、一応……？ただ、その人がコレを落としてそのままどこか行っちゃって……」

と、僕は先程拾った小さな袋を美羽ちゃんに渡した。

「落し物？」

僕達が戻るとその落し物を枡形さんに見せた。

「で、これがその怪しげな男が落としていった袋か」

「は、はい……ただ、その人、妙に焦っていて……」

「中身は……錠剤か？」

袋から取り出された物はクリアケースで小分けされたタブレット状の白い塊だった。

ケースの表面には何も記されておらず、なんの薬かもわからなかった。

「なんのお薬だろうね」

「ただのサプリなら問題ないけれど……違法ドラッグという可能性もありうるわね」

「ふむ……」

確かに怪しげな感じはする薬だ。

「この街でもドラッグって流行っているの？」

そこらへんは僕はよくわからず隣にいる布良さんに聞いた。

「んー、流行るといふほどのことではないかな。吸血鬼さんには、覚せい剤と違って効果が

ないみたいだから」

「そうなんだ……」

確かそんな事を美羽ちゃんに聞かされたような気もするけど……

「市場としてはリスクが大きいくせに、メリットは少ないんじゃないかな？」

確かにそうかもしれない……吸血鬼がたくさんいるこの都市でもあまり売れるものじゃないだろうけど。

「でも、ここに普通の人も住んでるし、旅行に来た人が羽目を外して……ってこともたまにあるみたい」

「完全になくなることはないんだね……」

「それに吸血鬼も、全てのクスリに耐性がある、と言うわけではないの。だから、そのうち吸血鬼に合わせて精製されたドラッグが出てきたりしたら……どうなるかわからないわね」

吸血鬼も万能と言うわけではないんだ……いや、吸血鬼にも弱点はあるんだっけ？

「不審な薬物として、調べられるだけ調べてみるか。既存のドラッグかどうかだけなら、すぐに判明するだろう。成分分析と同時にその落とし主を探すぞ」

僕が持ってきておいてなんだけど少し大事になつてきてしまった……

「流石に売人がそこまで間抜けだとは思えないが、下手すりや盛大なパーティーが計画されてるかもしれん」

けど、見逃すこともできないらしい……こうも怪しげな薬を落としていったのだからやれることとはやるらしい。

「とにかく、このまま放置はできん。新人には多少荷が重いかもしれんが、紅も調査に参加しろ」

「わ、わかりました」

「はあ、疲れた……」

白い入浴剤を使った風呂に入りながら僕は体を解す。

あの後、薬を落とした男性を探したが見つからず、とりあえず今日の仕事は終わりとなった。

「渡、お疲れさん」

バイオリン型の桶を風呂に浮かばせながら、それに乗っているキバットが労いの言葉をかける。

「ありがとう」

「それで、どうだ？こっちでやっていけそうか？」

「うん、なんとかね」

「それなら、よかつたぜ。渡は人見知りが多いしな」

「余計なお世話だよ……それにしてもファンガイアなんて本当にいるのかなあ」

あまりそういう話を枳形さんたちから聞かないし……ほとんど吸血鬼の話ばかり。

「どうだろうな……けど、太牙の話だといえるんだろう？」

「うん、あまり……兄さんを疑いたくない……」

「なら、太牙を信じろよ」

「うん……」

そう言つて僕はお風呂を上がつた……

僕が学院に編入して二日が経つた……なんとか授業についていけているものの、まだ不安が残る。

それに学院が終わると風紀班の仕事もあるんだ……少し大変だ。

「えつと……ここでもいいんだよね？」

僕はこの間、美羽ちゃんと一緒に来たバー“アレキサンド”に来た。

なぜここに来たのかというと昨日の薬の件が絡んでいる。

あの薬は正規で販売されているものではなく、病院で出されるものではないとまでわかつたらしい……そこまでしかわかつておらず、詳しいことはわからないらしい。

そこで萌香さんという”アレキサンド”のオーナーに会うらしい。

その萌香さんというチャイナ服を着た人は陰陽局に所属しているらしく、色々なことに詳しいという話だ。

つまりその人にこの錠剤を聞きに来たのだ。

「けど、本当にわかるものなの？」

「あの人は手掛かり一つで本人が忘れているようなところまで調べ上げるから」

「本当、怖いよねえ。あ、紅君も萌香さんは敵に回さない方がいいよ。脅迫されちゃうよ」

「え、脅迫……？」

「ううう、本当、思い出ただけでも恐ろしい……」

一体、布良さんは何を脅迫されたんだろうか……思わず気になってしまった。

「とにかく、必要以上に自分の情報を漏らさない方がいいってこと」

「うんうん。自分が何歳までオネシヨしてたかで、からかわれる羽目になるよ」

お、オネシヨ……？

「まあ、そんなとこまで調べ上げてても不思議ではない相手ということよ」

「な、なるほど……気をつけるよ……」

少し会うことが怖くなってきた……その人はもしかしたら僕の事を知っているかも

しれないし。

「いらつしやいませー。あつ、来てくれたんですか？」

店に入るとウエイトレス姿の莉音さんが笑顔で迎え入れてくれた。

「えつと…飲みに来たんじやないんだ…その、この店のオーナーさんに会いにきたんです……柘形さんと約束があつたはずなんですけど…」

「わかりました。今、オーナーは事務所の方でお仕事をされているので、呼んできますね。ちよつと待っていて下さい」

そう言つて、莉音さんがどこかへ行つてしまう。

「どうも皆さん、いらつしやいませ」

とそこで青い髪の少女がこつちに声をかけてきた。

「えつと……確か……」

「この子……僕と美羽ちゃんが最初に店に入つてきたときに…」

「大房 ひよ里です。これでもアナタと同じクラスですよ？」

「大房さん……同じクラス……あつ！」

少しだけクラスでも見たことある、と思いを上げてしまった。

「どうも、紅 渡です……」

大房さんに軽い自己紹介をして頭を下げる。

「これからよろしくお願いします。ご注文はお決まりでしょうか？」

「えっと……今日はそんなつもりじゃあ……」

「いいじゃない、飲み物ぐらい。風紀班の制服を着ているわけでもないし」

え、いいのかな……？

「そうだね、少し喉が渴いちゃったよ。私、シユプライト」

と、僕が一人だけ首を傾げていると布良さんが注文する。

「えっと……じゃあ、何にしようかな……コーヒード甘めのを」

布良さんも頼むらしいから僕も気を許して頼んだ。

「私はブルームーンを」

「シユプライト、コーヒードブルームーンですね、畏まりました。少々お待ちください」

大房さんが注文を繰り返すとそのままカウンターに戻った。

「美羽ちゃんつてば、またお酒なんて飲んで」

「酔えないし、依存症もないのだから、ジュースもお酒も変わらないでしょう」

吸血鬼からしてみればそうかもしれないけど……



「いらつしやいませ、矢来さん、布良さん、それから……」

二人がそんなことを話していると、とある女性が僕たちに話しかけてきた。チャイナドレスを着た女性が美羽ちゃん、布良さん、僕という順番で見えてきた。

「あ、僕は——」

「初めまして、紅 渡君」

「え？」

まだ名乗ってもいないのに名前を言われた。流石にこれは僕も驚きを隠せなかった。「例の事件で、君のことは聞いているわ」

僕の頭の中の疑問に躊躇いなく答えた。

けど、この服装……布良さんが言っていた萌香さんという人に一致している。

「えつと……まさかとは思いますが、名前以外に知ってることってありますか？」

少し不安を持ちながらも、どこまで知っているのかを聞きたかった。

「あはは、特筆するようなことは知らないわよ。知っているのは精々名前と……」  
名前と？

「本土では古びた館に住んでいて近所の人から”お化け太郎”と呼ばれているとか」

昔の僕のあだ名を普通に喋りだす萌香さん。

「よく”カフェ・マル・ダムール”に顔を出すけどあまり人付き合いは良くない。所持し

ている免許証は大型二輪免許証、ワザワザ大型なのは趣味なのかしら？」

「え、いや……取っておいて損はないかと……」

「ああ、そうそう。アナタ、本土では一度も学校に通っていなかったわよね。だからみんなよりも年上なのよね」

「え、そうなんだ？……っていうか紅君、一度も学校に通ったことがなかったの!？」

「う、うん……色々とあつて……」

まさかそんなことまで知っているなんて……さすがに僕は動揺してしまう。

「あとそれにアナタの父親はあの幻の天才演奏家の紅 音也。君は本土ではバイオリン職人をしていたそうね」

「なっ!？」

ぼ、僕の父さんの事まで……さすがに今まで僕と父さんの関係を結びつける人はほとんどいなかったけど、そこまで知っているとなるとさすがに気まずい。

「渡、それ本当なの？」

美羽ちゃんが横目でこちらを見て、布良さんは目を見開いた。

「う、うん……紅 音也……知らない？」

「うくん……名前くらいならどこかで聞いたことはある」

「私も……」

名前くらいは……それでも僕は父さんの名前を知っていてくれて嬉しかった。

「あの、陰陽局で情報部にでも所属しているんですか？」

「陰陽局にそんな班はないわよ。アタシが働いているのは、監督班。主に風俗街の監督を受け持つてるわ」

「なんでそんな人が僕の情報を……」

「ちよつとした趣味？ほら、近所の事情にやたら詳しい人って昔からいるでしょう？」

「そういう問題じゃないと思うのだけれど……」

「ね、怖いでしょう？」

「改めて、初めまして。アタシは淡路 萌香。さつきも言ったように陰陽局の監督班で働いているわ」

「紅 渡です。よろしく願います……」

確かにこれなら美羽ちゃんや布良さんが言っていた事がわかる。確かに怖い……

「飲み物はもう頼んでる？」

「ええ、大房さんに」

「大房さん」

「はい、オーナー。なんですか？」

「今日は特別サービス。この子達の代金は店持ちで構わないわ」

「はい、わかりました」

萌香さんがどうやらサービスしてくれるらしい。何か申し訳ないけど。

「それではこちら、シユプライト、コーヒー、ブルームーンとなります」

「ありがとうございます」

「ごゆっくりどうぞ」

大房さんはそのまま仕事に戻り、僕は萌香さんの方を見た。

「それで、稲叢さんから話があるって聞いたんだけど、なんの用かしら？」

「ウチの主任から連絡がいつてませんか？調べてほしい事があるって」

「ああ、何かの薬のこと？」

「何かわかりました？」

「とりあえず、現物を見せてくれる？」

布良さんと萌香さんの話がどんどんと進んでいく。

「えっと、これです」

僕はポケットからその錠剤を取り出し萌香さんに渡した。

「ん……MとかSとか刻んであるとわかりやすいんだけど……」

「有名どころのドラッグではない、って話だそうですね」

「どうやら萌香さんでも詳しくはわからないらしい。」

「何か新しいドラッグについて、心当たりありませんか？」

「そういえば、新作を流したがってる奴がいるっていう与太話なら聞いたことがあるかも」

「もつともそつち系の話はそんなに詳しくないから。とりあえず何かわかったらまた連絡するわね」

「お願いします。それじゃ、私たちは報告に向かいますようか」

「うん……」

とりあえず僕達は陰陽局に戻り、聞いたことを枡形さんに伝えた。

「情報待ちか……仕方ない、こちらはこちらでできることをやっつけていこう」

「できることと言うと？」

僕が思っていた疑問に布良さんが先に口を開いた。

「紅はクスリを落とした男の顔、まだ覚えているか？」

「はい、少し印象的だったので……」

確か黒髪をワックス？か何かでセットしているような感じだったから。

「けど、ちゃんと顔を見ないと……」

「見ればわかるってやつか。それで十分だ」

柘形さんがそう言いながらパソコンで何かのファイルを出していく。

「入島審査の時の防犯カメラだ。昨日の条件に入りそうな相手を抜き出してもらっている。カメラの位置的に恐らくお前の見た角度とは違うだろうがある程度ならわかるだろう」

入島審査のときの…？

「主任はあの落とし主を旅行者だと思っているんですか？」

「聞き込みで情報がなかった以上、あまり出入りしている奴ではないんだろう。なら、可能性は十分にある。それに、手慣れているやつならワザワザ目立つ場所で揉めたりしないだろうからな」

その言葉で僕は納得してしまう。さすがは本場の職業は違うんだな…そう思ってしまう。

「根拠としては弱くないですか？」

「だが、捜査の基準を決める判断の一つになる。例のクスリさえハッキリすればもう少しやり方もあるんだろうが今は情報が少なすぎる」

「聞き込みを続けるとしても他の方面からアプローチは必要だ。旅行者がダメなら、また他の方法を考えるさ」

そう言うのと柘形さんがこちらを見てきた。

「とにかくお前はビデオ鑑賞だ、紅」

「は、はい……」

そう言つて僕はなんとなくでファイルを開く……あまりこういうのは触つたことがない。

そのままファイルの中の動画が再生され、入島審査の様子が流れた。

顔も綺麗に見えるようになっており、映像でもわかり易かった。

「これなら……」

見つけやすい……そう思つて映像を眺める。

「違う……」

僕はそう呟きながら段々と映像を飛ばす。十数人も人が映るが全然ハズレを引くばかり。

「違う……違う……違う……」

段々と僕が機械のようになっていく……そんなときだった。

「あれ……？」

とある人物に違和感を感じた……目を細めてよく見てみる。

「似てる……」

服装は違うけれど顔立ちや髪型が似ていた。

「柘——主任、これを……」

柘形さんと呼んで一応、報告しておく。

「なんだ、もう見つけたのか？」

「えつと……この人かなり似ています」

「……ふむ」

「……確かに面影は重なるわね。調べてみる価値は十分にあると思います」

実際にその場にいた美羽ちゃんもこう言っている。これはあたりかもしれない。

「あの場にいた二人が揃って言うのなら、調べてみる価値は十分にある。紅、その映像の

日付は？」

「えつと……4月6日 14時47分です」

「わかった。その時の相手を問い合わせておく。お前は引き続き映像を確認しろ。その間に他に似ている人物がいらないかどうか。いなければ、さらに可能性は高くなりそうだからな」

「は、はい……」

「警察にも連絡を入れて、応援の手配をしておけ」

なにかかなり大事になってきた様な……



結局、映像を見続けていたけど、他にあの男性に似ている人はいなかった。

そしてその間に、僕が似ていると言った人のプロフィールや宿泊先が調べあげられていた。

「各自、写真には目を通しているな？対処は『金脇 健介』。4月3日に二十歳を迎えたばかりだ。昨日の昼に入島、ホテル『グラツシユラー』に宿泊中。あのホテルだ」

僕を含め総勢で十人も警察や風紀班の人が、ホテルの目の前にある広場に集まっていた。

「それでどうするんですか？」

警察官の一人が冷静な声で柘形さんに聞いた。

「一気に踏み込む。と、言いたいところだったんだが、まだ対象が落とし主だと決まったわけじゃない」

「そういうわけで紅、まず部屋を訪ねて顔を確認しろ。俺も一緒に行く」

へ、部屋を……

「わ、わかりました」

ここで断るわけにもいかないから柘形さんの指示に従う。

「で、もしもの際に備えて、他は全員配置についてくれ。よろしく頼む」

柘形さんの声とともに、みんなが決められた持ち場に付き始めた。

「あの主任、私たちは？」

「配置場所、聞いてないんですけど……」

けど、その中でどうやら美羽ちゃんと布良さんは配置場所を決められてないらしい。

「お前らも一緒に来い。もし荒事が起きた時には、誰かが紅の面倒を見ることになる。

俺に余裕があるとは限らん」

『主任、予定外の事態です』

突如無線から声が聞こえる。今のセリフを聞く限りあまり良さそうには思えないけど。

「どうした？」

『対象が部屋の外にいます。どこかに移動するようです』

「こんな時間にか？朝の5時前だぞ？」

対象がどこかへ向かうらしい……

『エレベーターを降りて、正面口に向かっています。服装はチェックシャツにジーパン』  
「確認した。ひとまず全ユニット、いつでも動ける準備をしておけ、台本を変更する」

台本……つまりは作戦を変更するんだろう。

確かにこれは予定外の事態だ……一体対象はどこへ向かうんだろう。

「台本変更つてどうするつもりなんですか？」

「C班はそのまま対象の尾行を。他は車を使え。相手は徒歩のようだからな、気付かれ  
ないようにな」

「僕達は……？」

「当然追う。こんな時間に移動するとなると、例のドラッグの可能性もある。引き締め  
ていくぞ」

枅形さんの指示に従い、僕達は対象が向かった方に足を運んだ。

対象を尾行してから十五分ぐらいが経った。まだ、あたりは暗く、対象は歩道を歩く。

「あつ、止まった」

突如、対象が曲がり角のところまで止まった。

「でもこんなところなにもないわよ」

幸い人影はくつきりと見えており、対象がキョロキョロとしている。

『南から灰色のセダンが近づいてきます』

「ちっ、やつぱりか。車の中で取引するつもりだろう」

車の中で……確かにそれだとあまり怪しまれないかもしれない。

車が対象の目の前で止まると後部座席のドアを開け対象が中に乗り込んだ。

「対象が車を降りたら、売人はそのまま立ち去ろうとするはずだ。その前に現行犯で押さえる。車で相手の進路を塞げ。準備はいいな？」

『問題ありません』

『いつでもいけます』

警察官のやる気のある声が無線を通して聞こえてくる。

「誰か車内の様子を確認できる位置へ移動できるか？」

『自分がいけます』

「よし、後は実際に何かを渡す瞬間さえ見えれば」

手慣れている感じで事を進めていく枡形さん……凄いな……

『車が3台きりなのは少し不安ですね。せめてあと1、2台あると、前と後ろをきつちりと防げるんですが』

「ないものねだりをしてしても仕方ない。それよりも車内の様子はちゃんと見えてるか？」

『ええ。手元まではハッキリ、とは言えませんが、それでもブツのやり取りぐらいなら問題ありません』

「そいつは結構。全ユニット、突撃の準備を始めておけよ」

その言葉と同時に、柘形さんがこちらに視線を送る。

「矢来は吸血する準備をしておけ」

吸血……美羽ちゃんも吸血するのか……

『金銭を確認。パックを代わりに受け取った模様っ！』

布良さんの血を吸血している美羽ちゃんを他所に無線が入った。

一気に空気が一変し緊張が走る。

「よし、ならっ——」

『いや、待って下さい。売人の方が誰かと電話を始めました』

「さらに追加の取引でも行うつもりか？」

『わかりませんが、何かを話し込んでいるようです……っ!? ヤバい! こつちを見た! 気付かれたか!?!』

「くそっ、見張りがいたか! ええい、このまま突っ込むぞ! 全ユニット突入だ! GO、GO、GO、GO!」

警察官の車がサイレンを鳴らし僕達は現場へと駆け込んだ。

咄嗟に売人が逃げようとするもこちらの方が早く、3台の車が身動きを取れないように固めてしまう。

「動くなっ、警察だ！」

外に飛び出した警察が拳銃を手に大声で叫ぶ。

「車を降りろ！降りるんだ！」

「ひっ！う、撃つな！今、降りる！」

警察に怯えて対象の男性が車を降りた。

パン！と乾いた銃声が金脇の動きを凍りつかせた。どうやらその銃声は売人が持っていた拳銃らしく売人が車を降りた。

「チッ……」

売人が舌打ちをすると、普通ではありえない光景を目のあたりにした。

突如、売人の体からステンドグラスのような模様が広がり、空中に謎の物体が二つ現れた。

「なっ!?!」

ファンガイア!?!さすがにこれは僕でも驚いた。早くもファンガイアと出会うなんて

……

この状況に警察はもちろん柘形さんや美羽ちゃん、布良さんも迂闊には動けなかつ

た。

グサツ！と謎の物体は男性の体に突き刺さると男性は抵抗することなく倒れ姿が消えていった。

「あれは……!?!」

あの謎の物体は吸命牙と呼ばれるもので、ファンガイアが人間の命をライフエナジーに変えて吸い尽くすための牙だ。

「フン……」

そのまま売人の本当の姿を顔にした。ステンドグラスのような模様の体を持つ何か獣のような姿にも似た存在。

人はみんなこう言う……怪物と。

「チツ、よりにもよってファンガイアに当たるとは……」

柘形さんがそう呟いた。どうやら風紀班の方でもファンガイアの存在は知られていないらしい……

「……………」

タイガーに似たファンガイア……恐らくタイガーファンガイアなのだろうが、一歩ずつゆっくりと警察官に近づく。

「う、動くな！」

「警察官も怯えているのか一歩ずつ下がりがりながらそう警告する。

「おい矢来、お前の能力でなんとかできるか？」

「距離がありすぎます、そもそも吸血鬼の能力でもファンガイアに勝ち目はありません」

「そうだな……布良はどうだ？」

「狙えなくもありませんが……」

「よし、何度も撃つてファンガイアを怯ませろ」

「その間に矢来が近づいてファンガイアを押しやる」

「柊形さんたちがそんなことを話し合っている……僕としてはどこかで変身してファンガイアを倒さないと……けど、キバットは部屋だし。」

「あれは普通に人を襲った、それに違法な商売もしている……これは倒しておかなければ害となってしまう。」

「——っ」

「そこで布良さんが奇妙な物を取り出した。見た感じ銃にも見える物をファンガイアに狙いを定める。」

「ファンガイアは一歩ずつ警察官に近づいていく。」

「どうやら警察官を恐怖に陥れたあとに食べるつもりらしい。」

「こんな時にキバットがいれば！」



「ひ、ひいつー！」

ファンガイアが静止し吸命牙を出現させた直後だった。

パァン！と自分の耳元で銃声が響いた。

「っ!？」

突如、襲いかかった銃撃にファンガイアは身体をよろめかすも、すぐさま体制を立て直しこちらを見た。

パァン！と再び銃声、だがそれはファンガイアには当たらなかった。

「なっ!？」

ファンガイアは銃弾が放たれると同時に跳躍で避けて、道を塞いでいる車を軽々と飛び越えた。

だが、それでも布良さんは撃つことをやめなかった。三度目の銃声……

ギンツ！

「っ!？」

三発目の銃弾をタイガーファンガイアは自身の爪で弾いた。

さすがに布良さんもこれには動揺をせざるを得なかった。

「布良さんっ！」

四発目の銃弾を放つ準備をするけど、布良さんとファンガイアの距離が近い。

ファンガイアは布良さんに爪を振り下ろそうと腕を上げていた。

僕は布良さんを覆うように抱き押し倒し、なんとかファンガイアの爪を免れる。

「チツ……」

ファンガイアが舌打ちをしてこちらにやってきた。

「紅君……?」

「布良さん、逃げて」

僕は起き上がり布良さんを隠すようにファンガイアの前に出て、逃げるように促す。

「で、でも……」

「いいからー!」

僕が叫ぶ。こういう時にキバットがいれば……

ファンガイアが再び腕を振り上げた。どうやら爪を振り下ろすつもりらしい。

「っ!」

けど、その直後ファンガイアの身体が横に吹き飛んだ。

僕は何が起こったかわからず目をパチクリさせてしまう。

「なんとか間に合ったわね」

美羽ちゃんがこちらに駆け寄ってくる。どうやら美羽ちゃん的能力でファンガイア

が吹き飛んだらしい。

「無茶しすぎよ」

美羽ちゃんが僕を睨みながらそう言った。

「でも、ああしてないと布良さんが」

「言い訳は後で聞く、それよりもファンガイアを追うぞ！」

柊形さんの言葉に警察官が吹き飛ばされたファンガイアの方へと足を運んでいく。

「了解、渡はそこで休んでなさい」

「紅君、その、ありがとね？」

美羽ちゃんも布良さんもそう言うのとファンガイアの方へと向かった。

「……………」

この場に僕一人だけとなる…………美羽ちゃん的能力と布良さんの射撃でファンガイアがどうにかなるとは思えない…

それはファンガイアと戦っていた僕が一番よくわかっている。

「渡！ファンガイアが現れた！」

そんな中、キバットがどこからか飛んできた。

「遅いよ、キバット。もう美羽達がファンガイアと戦っている」

周りに人影はない…………これなら…………

「いくよ、キバット」

「よっしや、キバっていくぜー」

僕は飛んでいるキバットを右手で掴んだ。

「ガブツ！」

そのままキバットの牙を左手に突き刺した。左手からステンドグラスの模様が広がり、そのまま体中へと広がっていく。

キバットから流れてくる魔皇力がベルトを出現させた。

何本もの鎖が腰に巻き付き、それが収束すると赤いベルトが形となった。

「……変身」

顔にステンドグラスの模様を浮かばせながらそう呟いた。

誰にも聞こえることなく囁かれた言葉は虚空へと消える。

左手から離れたキバットを前に突き出し、そのままベルトへと持っていく。そしてベルトのバックル部分にある止まり木に、キバットを宙吊りにセットした。

そして見えない何かが徐々に形を成していく、渡を覆った。

その見えない何かが砕けると、そこには渡の姿が変わっていた。

赤い鎧を身に纏い、まるで蝙蝠を連想させるような目、肩や右足には鎖が巻き付く謎の戦士がそこにはいた。

その名は——仮面ライダーキバ。

## 交錯・ウエイクアップ!

主任や美羽、布良を含めた九人は吹き飛んだファンガイアを追っていた。

と言っても吹き飛ばされたファンガイアは分が悪い、とても思ったのか……そのまま起き上がると警察官達から逃げるように走り始める。

「逃げるつもりか……布良! やつの足を狙えるか!」

「さすがに私でも無理です!」

距離が離れているためか……動いている足を狙い撃つという芸当はさすがにできないらしい。

「このまま奴を逃がすわけにもいかん! 追え!」

主任が大声でそう声を上げる。だが、人とファンガイアでは当然走力も違い、差は広まる一方……

誰もが諦めかけていたその時……

「っ!」

ファンガイアが足を止めた。

「なんだあ?」

さすがにフアンガイアの不可解な行動に首を傾げる一同。

「主任、フアンガイアが逃げるその先に人影が」

「なに!?!」

主任が目を細め、フアンガイアのその先にいる人影を見た。全身が鎧で覆われた謎の戦士——すなわち『キバ』がフアンガイアの前に佇んだのだ。

「あれはっ……!」

美羽が何かを察したかのように声を上げる。

『お前は!?!』

フアンガイアも体の表面にいくつもの人間態の時の顔を浮かばせながら驚いた。

「……………」

キバは何も言わずフアンガイアの方へと歩いていく。

ジャラジャラ……とキバが歩きたびに、所々にある鎖がキバの鎧と擦り合う音が闇に響く。

『くっ!』

フアンガイアはキバに自身の爪を振り下ろす。だが

「っ!?!」

フアンガイアの攻撃は綺麗に避けられ、そのままキバのパンチをモロに喰らう。

「……………」

そこからさらにキバは容赦なくパンチを叩き込む。そしてそのままパンチ、さらにパンチと連続。パンチを食らわしていく。

最後の一撃を食らったファンガイアはそのまま後方に吹き飛び、そのまま転がっていく。

予想外の事態に主任たちは迂闊に動けず、その様子をただ見ていることしかできなかった。

「……………」

キバがファンガイアを静かに睨みながら、右腰からとあるものを取り出した。

それは赤いホイッスルであった。そのホイッスルを持ち正すと、そのままベルトのバックル部分に宙吊りになっている蝙蝠のようなものの口に差し込んだ。

『ウエイクアップ!』

その声と共にベルトのバックルにいた蝙蝠が動き出し、独特な音が響いた。

「……………」

キバが腕を小さく広げゆっくりと腕を交差するように目前にやってきた。

ザツ!と腕を広げ、キバは右足を高く上げた。蝙蝠が高く上がったキバの右足に付いている鎖を断ち切ると、まるで力を開放するかのようになり、拘束されていた右足の翼が大



大きく羽ばたく。

大きな月を背に、ファンガイアをキバは見た。

「……………」

そのまま左足を曲げ、思い切り跳躍した。キバは身体を縦に回転させ、上空で敵を背に向け逆さまになった。

跳躍した頂点に達したかと思うと、キバは身体を回転させ、そのままファンガイア目掛けて右足を突き出し、急降下。

「ハアっ!!」

ドツツ!!というとてもない蹴りの衝撃がファンガイアを襲い、そのまま地面に叩きつけられる。

その衝撃は全て受け止めきれず、そのまま地面にも余波が来る。

そのままファンガイアはキバに踏み潰されるかのようにステンドグラスのように割れた。

だが、それだけでは終わらない。ファンガイアの魂ともいえるライフエナジーがその場に浮遊した。

ギヤアアアアア!と何かの雄叫びにも聞こえる声はその場に響き渡る。

キバは空を見上げる……建物にドラゴンの頭部と翼を生やした何かが飛んでくる。

それは巨大としか言いようがなかった……だが、その存在に気付いている者はほんの一部……このドラゴンには見えないのだ。

ドラゴン……キヤツスルドランと呼ばれる城を意味するドラゴンは、ファンガイアの生命の塊でもあるライフエナジーを飲み込んだ。

キヤツスルドランは満足したかのように翼を飛ばたかせどこかへ飛んでいく……

「……………」

その光景を近場で見てしまった美羽は足を震えさせた。

「……………」

キバはその場にいた九人を一瞬だけ見て立ち去ろうとする。

「待て！お前は何者だ！」

主任はキバに向かってそう叫んだ。だが、キバは聞く耳を持たず、キバの紋様の形をしたクレーターを地面に残し、その場から去るように消えていった。

「何なんだ、アイツは……」

主任は手で額を抑えながらそう呟いた……謎の戦士の登場……これは大きく、そして吸血鬼にとっては重要な出来事でもあった。

僕は美羽ちゃん達がいる現場へと向かった。

ファンガイアは倒しこれで一段落だろう…そう思っていた。

「しゅ、主任……」

「おう、紅か……」

どこか枅形さんが気を落としているように見えた。

「えっと……大丈夫ですか？」

「どうもこうもあるか。対象も売人もいなくなっちゃまったんだから」

「え？」

その言葉を聞いて僕は目を見開く。

「これで手かがりなしだ……しかも次から次へと……」

「何があつたんですか……？」

僕は思わずそう聞いた。

「変なやつがファンガイアを倒しやがったんだ」

「変なやつ?」

「そうだよ。何なんだアイツは…」

『主任、見張りをしていたと思われる男を確保しました』

そこで無線が入ってきた。

「なに、本当か!?!」

『はい、なんでも変なやつに捕まったらしくて……』

「変なやつ……?」

『この男の証言からするにファンガイアを倒した奴と同じようです』

柘形さんが一段落のため息を尽いた。

「よし、これで安心だな……だけど死人が…」

無事に解決したようで何よりだ……確かに人を救えなかったのは僕も悔しかった……

もっと早く変身しておけば……そう思ってしまう。

「よし、布良、矢来! 引き上げるぞ」

「え、あ………はい!」

「あれは………けど………どうしてこんなところに」

柘形さんの言葉に布良さんは返事をするも、美羽ちゃんだけ聞こえていなかったみたいだ。

「美羽……?」

「っ!」

僕は美羽ちゃんの肩を掴んだ。その時、美羽ちゃんの身体が跳ね上がるように反応し、素早くこちらを向いた。

「わ、渡……?ど、どうかしたの?」

「いや、引き上げるから……反応がなかったから声をかけたんだけど、大丈夫?」

「う、うん……大丈夫よ。少し考え事をしていただけよ」

「そう、なんだ……」

僕には少し怯えているようにも見えた気がした。

「それにしても紅、あの時は無茶をしすぎだ。いくら布良が危ないからと言って……」

「す、すみません……けど、あのままじやあ布良さんが……」

死んでいたかもしれない、そんなの僕は見過ごすわけにはいかなかった。

「それもそうだがお前、ファンガイアがどれだけ危険な存在か知らないだろう?」

「……………」

「いいか、ファンガイアっていうのは吸血鬼とかそういう生易しいもんじゃない……ファンガイアは、昔はなりふり構わず人間を食物にしか思っていないかった怪物だ」

「だが、最近ではどういうわけか穏健なファンガイアもいるんだが……ここでは悪さを

するファンガイアばかりなんだ。理由は知らんが」

やっぱりここにもファンガイアはいるんだ……今、柊形さんから聞いた話だとそれも二体や三体ではないって感じだけど……

「今の俺たちではあのファンガイアに対抗する力を持っていない。吸血鬼だってファンガイアにも勝てる見込みがない」

柊形さんはキバの紋様のクレーターを見下ろしながらそう言った。

「だけど、アイツは一体何なんだ……」

「——キバです」

柊形さんがそう呟いたとき、美羽ちゃんがハッキリとそう言った。

「牙?」

「はい。吸血鬼の中でも有名で、キバはファンガイアの王であり、他の魔族を滅ぼす程の力を持っています。かつて吸血鬼はキバの力にほぼ壊滅状態でした」

……それほど、キバは名があるということなんだ……

「——奴は危険です」

それは違う!僕はそう言いたかった。キバは……キバは……

「だが、ファンガイアを倒してくれる。ありがたい話だ」

「……………」

僕は何も言うことができなかった。

僕は風呂に顔半分を隠す。

「はあ……ねえ、キバット」

「どうした、渡？ 難しい顔して悩んで」

キバットが気楽そうにそう答えてくる。

「吸血鬼にとつて、キバってそんなに危険な存在なのかな……」

「まあ、ヴァンパイア族は昔、先代キバに滅ぼされかけたから……ヴァンパイア族にとつては恐ろしい存在なんだろうな……」

「……そう、なんだ……」

「ヴァンパイア族からキバの恐怖を取り払うのは、一筋縄ではいかないと思うぜ」  
キバットが僕の考えてることをまるでわかっているかのように答えた。

僕は平和に暮らしている人達に害を与えるファンガイアを倒すだけなのに……

「そう落ち込むなって。そのうちわかってくれるさ」

それならいいんだけど……

結局、あの事件から一日が経った。

あの時販売されていたのは、クエン酸シルデナフィル?とかいう薬らしい。

それに日本では未承認の製造元の薬を格安で売っていたらしい。

しかも販売しているのはそれだけじゃなく、違法な物まで取り扱っていたらしい……  
けど、ファンガイアがあんな売人をしていたなんていうのは驚きだった……しかもここに来てすぐに出会った……

ファンガイアの事はこの都市でもそれなりに知られているらしい……中では風紀班たちでも知らないところで人間達を食べているとか……

「ここでも頑張つてやっていけるかな……」

僕は部屋に飾つてあるブラッディ・ローズを眺めた。

父さんが残した最高傑作のバイオリン……このバイオリンを買い取りたいって人も多くいるけど手放したくなかった。それにこのバイオリンには大きな秘密がある……

コンコン、と誰かが僕の部屋をノックする。

「うん……?」



僕はドアの鍵を解除して、少しかだけドアを開けて誰が来たか確認する。

「やつほー、ワタル。遊びにきたよ！」

エリナちゃんが笑顔で僕にそう言い、半ば強引に扉を開けると、するりと僕の脇を通り抜け、部屋に入る。

「あ、遊びに来たって……特に面白いものなんてないよ？」

僕はエリナちゃんにそう言った。だが、エリナちゃんは聞く耳を持たず、ベッドの下を覗いたりしている。

「エリナちゃん、何してるの？」

「ワタル、エリナでいいよ。ワタルも男の子だからそういうのとか隠しているのかなーって」

「そういうのって……？」

ベッドの下に手を入れて何かを探っているエリナちゃん……特にベッドの下には何も無いのに、エリナちゃんが何をしているのか全くわからなかった。

「エッチな本とか……？」

首を傾げながら僕にそう言ってくる。

「そ、そんなのはないよ……」

僕は生まれ一度もそういうのは持ったこともなかった……

ていうか、女の子が探すようなものじゃないと思うけど…

「なんで急にそんなことを……」

「男の人ってどういう生活をしてるのかなーって気になってね。だからワタルの部屋に来たの」

「そ、そうなんだ……」

「けど、そういうものも見られないしつままない……」

なんでエリナちゃんは生活Ⅱ大人向けの本みたいな言い方をしているんだろう……

「あつ——」

そこでエリナちゃんがとあるものに目をつけた。

「ワタシ、これ知ってる！バイオリンって言うんでしょ？」

そう、エリナちゃんは部屋に飾ってある父さんのバイオリンでもあるブラッディ・ローズに目を付けた。

「うん、ブラッディ・ローズ……」

「ブラッディ・ローズ……」 血塗られた薔薇……?」

何かエリナちゃんが嫌な顔をしているようにも見えた。少し悪い印象を教えちゃったかも……

「えつと……ブラッディ・ローズは父さんが残したバイオリンの中でも一番の傑作なん

だ。色んな人が欲しいって言って買って買いに来るけど、それだけは売らない。たとえ一億出すって言われても」

必死に僕がフォローをして、悪い印象を与えないようにした。

「一億!？」

「うん、そのくらいの値打ちはあるんだって……」

僕がそう言うと、エリナちゃんがブラッディ・ローズを間近で見つめている。そして、エリナちゃんがクルリと僕の方を振り向いた。

「ワタルのお父さんって有名人なんでしょ？アズサから聞いたんだけど」

「うん……幻の天才演奏家って言われてたんだ……」

「ワタルのお父さんって凄いなー。ワタシ、会ってみたい」

「残念ながら父さんはもう……」

いない……あの戦いで父さんは最後の変身をして……

「ご、ごめんね……変な事を言っ……」

僕の様子からエリナちゃんは察したのか、申し訳なさそうに謝ってくる。

「気にしなくていいよ。けど、会ってみたいって言われると僕としては凄く嬉しい」

けど、父さんが生きていたとしてもあまり会わせるのはオススメしないかな……性格が少しアレだったから……

「……あ、そうだ。ワタルもお父さんみたいに演奏できるんでしょ？ワタシ、聞いてみた  
いかも」

「え、僕の……？」

「まさかとは思うけどワタル、弾けないの……？」

僕の反応を見て、疑うような目でそう問いかけてきた。

「いや、弾けるよ……ただ、父さんのようには上手く弾けないから」

「ワタシはワタルの演奏が聞きたいんだよ？それに、ワタルのお父さんの演奏は一度も  
聞いたことがないから、比べることなんてできないよ」

そのまま正論を言われて僕はぐうの音も出なかった。

「そう、だよね……じゃあ……」

僕は飾ってあったブラッディ・ローズを手に持ち、構えた。

「……………」

「……………」

真剣な目で僕を見てくるエリナちゃん。あまりエリナちゃんのこういう顔は見たこ  
とがない。

僕は馬の尾で作られた弓をバイオリンの弦で摩擦させ、ブラッディ・ローズの胴内で  
反響させた。

僕はそこから何も考えずにバイオリンを弾いた。奏でる音楽は僕がいつも弾いているもので、曲名やテーマも何もない演奏だった。

「……………」

僕はいつの間にか目を閉じて演奏をしていた。部屋中にバイオリンの音が広がり、自身の心も安らかになる気持ちだった。

以前、僕が布良さんにこの部屋は防音対策をされているのか聞いたのも、このバイオリンが弾けるかどうか確認するためだった。

幸い、防音対策はされていて、こうして安心してバイオリンは弾けるから良かった。

そしていつの間にか僕の演奏は終わった。弓をバイオリンから離し、僕は目を見開いてエリナちゃんの様子を伺った。

「……………」

目を見開きながら口をパクパクさせているエリナちゃんが少し可愛く見えた。

「えつと……………どうかな……………」

「ハラシヨー！ 凄いよ、ワタル！ ワタシ、音楽とか芸術はあまりわからないけどワタルが凄いつていうことはわかるよ!!」

エリナちゃんが興奮しながら声を上げてそう言ってくれる。

「ありがとう」

僕はエリナちゃんがそう言ってくれてとても嬉しかった。

「エリナにも弾けるかな?」

興味深そうに、エリナちゃんが近くにあったバイオリンを触る。

「さすがに練習しないと無理だよ……」

「ワタシも弾いてみたいな」

そう言つて、エリナちゃんがバイオリンの弦を弓で摩擦させる。当然、初心者が上手く弾けるはずもなく、ぎこちない音が部屋に響き渡る。

「よければだけど、教えようか……?」

僕の言葉にエリナちゃんの手がピタリ、と止まる。

「え、いいの?」

「エリナがいいなら……」

目を輝かせながら僕を見上げるエリナちゃん。

「けど、途中から投げ出しちゃ駄目だよ……?」

その言葉を聞いてエリナちゃんは少し戸惑ったものの表情をもとに戻した。

「うん、ダイジョーブ。投げ出さないと約束するよ」

「それならいいけど……」

「それでどうやって弾くの？」

「えっとね、まずはバイオリンはこうやって持って……」

エリナちゃんがそうやってバイオリンに興味を持ってくれたのは嬉しかった。

暗い小道を何かから逃げるように走る女性。

度々、後ろを見ては息を切らしながら走っていた。

「はあ……はあ……キヤツ！」

だが、走っていた女性はナニカにぶつかるとそのまま尻餅を付いた。

「い、いやっ！」

女性はぶつかったナニカを見て身体を震えさせた。人間より一回り大きいステンドグラスのような模様をした身体の巨体、ファンガイアだった。

ファンガイアが自身の背後に吸命牙を出現させ、女性に狙いを定める。

「や、やめて……来ないで！」

ファンガイアはそんな女性の聞く耳を持たずそのまま牙を射出した。

ザシユツ!

「い、イヤアアアアアアアアっ!」

女性の悲鳴がその場に響き渡る。だが、牙は女性に命中する寸前に消えてしまった。

「っ!」

背後から何かに斬られたような一撃を食らったファンガイアは、咄嗟に後ろを振り向いた。

『白い……キバ!』

ステンドグラスの表面から人間態の顔を出現させながらそのものを見た。

白い鎧で全身を覆い、蝙蝠のような形をした赤い眼。そしてキバよりも細い身体だった。

チャキ、と白いキバは白いサーベルを正面に構えた。

『くっ……』

ファンガイアは白いキバに襲いかかる。だが、その攻撃はいとも簡単に躲かれ、そのままサーベルで斬られてしまう。

「……………」

白いキバはそのまま何度も何度もサーベルで斬りつけた。



「っ!？」

フアンガイアは一旦、距離を取ろうとするも、白いキバの方が一手早かった。

白いキバはそのまま力強くフアンガイアを後方へ蹴り飛ばした。

ダンツ!とそのまま壁へ叩きつけられフアンガイアは地面に転がった。

「……………」

白いキバはそのままフアンガイアを睨みサーベルに力を込める。

白いサーベルの刀身が紫の光を放ち始めた。

フアンガイアは身の危険を感じ、慌てて起き上がるも、手遅れだった。

「……………」

白いキバが瞬時に懐に飛び込み、渾身の突きを放つ。サーベルはフアンガイアの身体を貫き、白いキバはそのままゆっくりとサーベルを抜いた。

パリン、とフアンガイアの身体がステンドグラスのように砕け、その場に何も残っていないかった。

「ひ、ひっ……………」

その光景を見ていた女性は怖くなり、その場から逃げ出す。白いキバはその女性を気にすることはなく、どこかへ去っていった。

## 二重奏・二人の牙

最初にファンガイアと戦ってから数日が経った。少しずつ学院での生活や風紀班の仕事も慣れてきた頃だ。

たまに起こる巡回先での揉め事の対応は少しばかり骨が折れるけど……

「……ワタル?」

と、僕が上の空で立っているとエリナちゃんが僕の顔を覗いてきた。

「え、あ……ご、ごめん」

「ダイジョーブ?こっちの生活に疲れているの?」

「いや、そんなんじゃないよ……ただ、ここに来てから色々あったなあ、つて……」

「そう?ここでの生活、楽しい?」

「うん、それなりに楽しいよ」

と僕はそう言いながら頷いた。確かに悪くはないかもしれない。

そもそもここに来るまでは一人暮らしをするつもりだったけど……こう大勢の人たちに囲まれて食事をしたりするなんて思っても見なかった。

本土の方ではだいたい一人で食えることが多かった……だから、いつも囲まれて食事

をしていると何かと安心感が感じられる。

最近、この都市では“キバ”の噂が広まりつつあった。

あまり、僕としては嬉しくないんだけど、キバの正体がバレていない分まだ大丈夫であつた。

「矢来、連中に動きはあるか？」

そんなことを思っていると枡形さんが僕たちにそう告げた。今は風紀班の最中……しかも今回は取引現場の取締だ。

「いえ、特には」

気付かれないように倉庫の中の様子を確認しながら美羽ちゃんは短くそう告げる。

「ブツは確認できたか？」

「いえ、まだ見えません」

「そうか。わかった、ブツを確認した時点で突っ込むぞ。全ユニット準備をしておけ」

最近では風紀班の仕事の最中にファンガイアと遭遇する確率が高く、今回はキバットを懐に隠してある。何かあつてからでは遅いんだ。

「あつー！」

そこで布良さんが声を上げた。

「なんだ、どうした？」

柊形さんが布良さんの声に反応すると、布良さんはどこか言いにくそうに顔を真っ赤にした。

「いえ、その、あの……み、見えちゃいました」

「見えたつて、ブツか？」

「確かなんだろうな？ お前、恥ずかしくてすぐに目を逸らしたりしてないか？」

布良さんが恥ずかしがるほどのブツ？ どんなのだろう……少し僕は気になった。

「うっ、あ、あんなの直視なんてできませんようっ！」

「こつちからも確認できました。情報通り間違いないですね」

そんな布良さんの言葉を気にせずに美羽ちゃんがそう告げた。その言葉を聞き、柊形さんが僕たちを見る。

「よし、全ユニット、突入だっ！」

枅形さんの声と共に待機していた人たち全員が動き出す。応援に来ていた警察のパトカーがサイレンを鳴らしながら、倉庫の出入り口を塞ぐ。

相手にとっては予想もしない展開らしくて狼狽しきっていた。

「警察だ！全員、武器を捨てて投降——」

しろ！と警察官の一人が言おうとしたときだった。

パアン！と警察官の聞く耳を持たずそのまま相手がパトカー目掛けて発砲した。

「くそっ、本気か!?撃ってきやがった」

僕は一先ず背を低くして物陰に隠れた。僕は一応、人間ということになっていて一応模擬弾の入った拳銃を渡された。これでも一応、風紀班の方でも扱われている……

「情報通り、本土の暴力団関係だろう。使っているのはマカロフだし」

「応戦しますっ！」

布良さんはすぐにハンドガン？を構え狙いを定める。三発もの模擬弾は全て相手に命中する。

だが、相手もそれだけでは終わらず撃ってきた、倉庫内が銃撃戦へと変わっていく。

「!？」

そんな中、一人の男性が脱出しようとしている。

「主任！」

僕はできるだけ大声で枡形さんに呼びかける。

「なんだ？こつちは今、忙しいっ！トイレに行きたいのなら、一人で行ってこい！」

こんな状況でトイレに行きたい人なんていないと思うんですけど……そんなツツコミを僕は口には出さなかった。

「いえ、そうじゃなくて、犯人の一人が逃げます！あの、追いかける許可を！」

「待てっ！お前一人じゃ危険だ！布良と一緒に行け！」

どうやら、僕の近くにいた布良さんと一緒に行くことになるらしい……けど布良さんがいてくれると心強い。

「逃がすなよ！逃げられたら今日も残業だ！」

さすがに残業はしたくない……なら、捕まえるしかない……

「了解！」

布良さんがそう返す。その言葉を聞いて、僕と布良さんは逃げた犯人を追いかけるように倉庫を飛び出す。

「布良さん、見える？」

少しだけ走る音が聞こえ、暗いけども人影は見える程度はわかった。

「うん、なんとか……これなら……狙えそう」

そう言つて布良さんがハンドガンを構え……パンツ！と発砲した。

その模擬弾は見事命中し、犯人はその反動で体制を崩し地面に転がった。

いまなら……捕まえられる！

そう思い、僕は全速力で犯人の元に駆け寄り押さえつけた。

「くっ、貴様ら……人間の分際で……」

「え？」

一瞬、犯人の力が緩んだかと思うと、犯人の体からステンドグラスの模様が浮かび上がる。

まさか……フアンガイア!?

「紅君！」

僕のすぐ後ろの方で布良さんの声が聞こえてきた。

「布良さん、逃げて！」

「え？」

僕の声と同時に犯人が本当の姿となり、僕の身体を簡単に吹き飛ばす。

「紅君っ！」

今の光景を見て布良さんがこちらに駆け寄ってくる。

「だ、大丈夫!？」

「う、うん……なんとか」

少し背中が痛い程度にだけど、いつもと比べるとマシだった。

「それより犯人は？」

「どうやら私達と戦う気はないみたい……」

「……逃げたの？」

さすがに残業はマズイかもしれない……僕の脳裏にはそんな言葉がよぎった。

「いや、まだ遠くには行っていないはずだから大丈夫。紅君は休んでて」

「え、ちよつと——」

待って！と言おうとする頃には布良さんは暗闇の中に消えていった。さすがに布良

さんが戦えると言っても一人では危険だ。

もしかすると、布良さんが食べられるかもしれない。

そんなのは……

「——キバット」

僕は静かにそう呟いた。

「よっしゃ！キバって行くぜ！」

懐から飛び出たキバットは僕の周りを迂回し始める。

「ガブッ！」



僕が左手を前に突き出すと、キバットはそのまま左手に噛み付いた。キバに変身するときに見れるステンドグラスのような模様が顔に浮かび上がる。

「変身」

その単語と同時に、キバットが僕の腰に出現した赤いベルトに宙吊りでぶら下がる。仮面ライダーキバは闇の中を突き抜ける。

暗い道を必死に走るファンガイア。さすがに取引現場がバレてしまったのなら諦めるしかない……

これは逃げではない。戦略的撤退だ……そう何度も自分の中で言い聞かせる。

「……………」

だが、そこでファンガイアの前に通せんぼするかのようになにかが立ちはだかった。

白いキバだ。

「っ!？」

ファンガイアはすぐに自身の剣を具現化させると、すぐさま白いキバに剣を振り下ろす。

白いキバはファンガイアの剣をサーベルで受け流すと、流れるような動作でファンガイアを斬りつける。

よろめくファンガイアは後退りながら距離を取る。

「っ!？」

「あれは……!？」

そこでファンガイアの背後の方から赤いキバが現れた。

キバ二人に囲まれるファンガイア……絶対絶命とはまさにこのことであろう。

「……………」

赤いキバは白いキバの方に注意がいつてしまう。

そんな中、白いキバはサーベルに紫のオーラを纏わせると力強く、素早く、美しくサーベルを振り下ろした。

パリんっ!と白いキバから放たれた紫色の斬撃がファンガイアの身体を砕いた。

「……………」

「……………」  
無言で立ち尽くす赤と白のキバが二人、今でも一触即発の雰囲気を放つ。

「……………」

直後、白いキバが動いた。サーベルを構えなおしそのままキバへと直進する。

だが、キバもこの行動を予想していたのか素早く後ろへ下がり剣戟を避ける。

サーベルを持つ白いキバの方がリーチは長く、反撃もできないキバに対してそのまま何度も剣戟を繰り返す状態、いつの間にかキバは塀へと追いやられていた。

「っー」

そこ！と言わんばかりの強烈な突きがキバへと放たれる。だが、キバも一筋縄ではいかずそのまま跳躍し、背後の塀を飛び越えた。

サーベルの剣先はそのまま塀を貫いた。白いキバは素早くサーベルを抜くと塀を飛び越える。

「……………」

「……………」

再び睨み合う二人のキバ。お互いの顔は仮面に隠れていて見えなかった。

白いキバが再び動き、月の光によって反射される剣戟がキバを襲う。

キバは華麗な動きで避け、白いキバから逃げるように剣戟を躲していく。

いつしか剣戟は止まり再び睨み合う二人であったが、キバが痺れを切らしたのか、ゆつくりとした動作で左腰にある青いホイッスルを取り出した。

「剣には剣を、だな……」

キバットが小さく呟いた。

キバが青いホイッスルをキバットの口に差し込んだ。

「ガルルセイバー!」

キバットの声とその笛の音が闇夜に響く。白いキバは警戒するかのようによく歩後ろへ下がり、サーベルを構えた。

だが直後、どこからか何かが飛んできた。

キバはそれを左手で掴むと折り畳まれていた刀身が展開され、剣へと変わる。

狼に似た雄たけびと共に左腕と胸部が鎖に覆われ、収束したかと思うと青くなっている。

「っ!」

白いキバは目の前の光景に驚きさらに後退した。

「グルル……」

そんな白いキバを睨み付ける複眼は、いつの間にか黄から青へと変わっていた。野生の獣のような荒々しく肩で呼吸するかのように身体を動かす。

「……！」

するとキバが動く……ガールセイバーと呼ばれる剣を素早く振り下ろす。

その動きはいつものキバよりも早かった。白いキバでもこのスピードには対処しきれずモロに食らってしまう。

白いキバもこの攻撃には黙っておらず反撃を繰り出す。だが、この攻撃は空を切った。

いつの間にかサーベルのリーチ外にいたキバは、素早い動作で懐に踏み込み、いくつもの連撃を繰り出す。

「——っ！」

白いキバはなんとかその場で踏ん張り、後方へと跳躍した。

再びガールセイバーを構えるキバ。直後、白いキバがキバに向けて斬撃を飛ばす。

「！」

キバは咄嗟に腕を交差しガードの構えを取った。だが、その斬撃はキバには当たらず、キバの足元に直撃し、目くらましのよう火花が散った。

キバは火花を振り払うように腕で払い除け、白いキバへと目を向ける、も……

もうそこには誰にもいなかった。キバは数秒、その場に立ち止まるもどこかへ走り

去っていった。

僕は変身を解除するとすぐに布良さんを探した。

先程、白いキバとファンガイアが戦っていた場所とそう遠くないところにいた。

「布良さん！」

「紅君！動いて平気なの……？」

「う、うん、なんとかね……それよりファンガイアは？」

「それが……その、白いキバがファンガイアを倒したのを見たんだけど」

「白い、キバ……？」

あのキバは一体、何者なんだろうか……帰ったらキバットに聞いてみないと。

さすがに今聞くのはちよつとね……

「うん、なんか私達が見たこの間とは別みたいなの……だってその二人がさつきまで戦っていたんだもの……」

「そう、なんだ……」

あの一部始終を隠れて見ていたらしい布良さん……まだ正体がバレてないのには安心した。

「とりあえず、主任に報告しにいかない」と

僕達が倉庫に戻るといつの間にか銃撃戦は終わっており、相手の男たちはみんな倒れていた。

「おう、そつちも終わったか」

「はい、ただ逃げた犯人がファンガイアだったので……」

「チツ、またファンガイアか。最近はどうもこうも多いな、一回、上と相談するか」  
手を額に当てながら悩む柾形さん。

「それで、お前ら、そのファンガイアはどうした？まさか逃がしたんじゃ……」

「い、いえ、その……白いキバがファンガイアを倒したんですけど」

「はあ？白いキバだあ？」

「本当に見たんですって！」

白いキバ……確かにあのキバは今まで見たことも聞いたこともない。

「白い、キバ……？いつものキバとは違うの？」

「う、うん……だってその二人が戦つてるところも見だし……」

確かにあの時は危なかったし、やらねばなしというわけにもいかなかった。咄嗟にガルルセイバーを呼び出してなんとか撃退することに成功したからいいけど……

「まあ、いい……撤収の準備だな。おっと、その前にお前ら、ブツの確認をしておけよ」「えっ、ええええええっ!?!か、確認って、アレをですか?」

布良さんが顔を赤くして大声を上げる。

「仕事だ、わかったな……」

「はい……」

「……わかりました」

「嫌だなあ、もう……」

布良さんがそう言いながら溜息をつく。僕は少し中身が気になり、その“ブツ”の中身を確認した。

「これって……」

その中身は未成年が見てはいけないものだった……僕は成年だから一応、問題ないけど……女の子の前で確認するものじゃないと思うけど……



風紀班の仕事が終わった。ブツを押収しそのままあれやこれやと報告書を書いて終わった。

「キバット、あの白いキバって……」

僕は身体をお風呂に浸かりながら、横にいるキバットに聞いた。

「あ……あれはだな」

少しキバットが言いにくそうに口を濁らせる。

「……………」

「あれはキバーラ……俺の妹だ」

「妹!？」

「ああ、あの姿はキバーラを通して変身するんだが、女性しか変身できなくてな……」

「ていうことは、女性のファンガイア……」

「いや、キバーラの場合は普通の人間でも変身できちゃうんだ」

ボソツと呟いた僕の言葉を否定したキバット。

「えっ……………ていうことは人間?」

「いや、そこはわからん……ヴァンパイアでも変身できるかもしれないけどな、ただ女性  
なだけ」

「女性のキバ……仮面ライダーキバラー」

僕のキバが仮面ライダーキバと呼ばれているなら、あの白いキバは仮面ライダーキ  
バラーとも呼ぶべきものだろう……そう思いながら僕は顔半分を風呂に浸らせる。

僕の知らないキバがいたなんて……

僕は風呂を上がるとそのまま携帯を開き、とある人へとかけた。  
『こんな時間にどうした、渡?』

こんな時間……確かにもう深夜も回つてもうすぐ朝になる。

「あ、兄さん……ちよつと聞きたいことがあるんだけどいい?」

『ああ、問題ない。何が聞きたい?』

「今日、ファンガイアを見つけたんだけど白いキバが現れて……そのファンガイアを倒したんだ」

『白い、キバ……?』

兄さんの声が少しだけ強くなった。

「うん、キバットに聞いたら、そのキバはキバットの妹のキバーラを用いて変身した姿らしいんだけど……何か知らない?」

『……いや、俺も知らないし聞いたこともないな』

兄さんの声は迷いなくそう言った……どこか嘘をついている様子もなく、いつもの声色でそう言った。

『ファンガイアを倒してくれているならありがたい話だが、気になるのか?』

「うん、その白いキバ……キバーラは僕に襲いかかったし」

『渡に……?少なくとも味方、という事はなさそうだな……わかった、調べておく』

「うん、ありがとう……」

『気にするな、お前は俺の大切な弟だからな』

そう言ってもらえて僕は嬉しくなった。兄さんと死闘を繰り広げた事が嘘のようにも思えてきた。

## 間奏・ブラックジャック

う〜ん……僕はとある物を茹でている鍋を見る。

「ワタル〜?」

自室のドアの向こうからエリナちゃんの声がしたので、僕は扉を開けて部屋に招き入れた。

「だけど……」

「っ!?!」

突如、エリナちゃんが自分の鼻を塞ぎ始めたのだ。

「え、どうしたの?」

明らかに顔を青くして僕の部屋の中の様子を見る。だけど、なぜか部屋の中には入ろうとしなかった。

「……?」

僕は首を傾げながらその様子を見守った。

バタン、と一回扉を閉めて数秒後、再び扉を開ける。

「な、何この匂い!?!」

エリナちゃんはそう言いながら僕の部屋の窓を開ける。

「ぷはっ……」

「だ、大丈夫？」

「ワ、ワタル……これ、なんの匂い？」

「匂い……あ、これの事？」

僕はそう言つて目の前にある鍋の蓋をとつて中身を見せる。

「っ!? な、な、何してるの!？」

何かおかしいのだろうか？

「何つて……ニスを作つてるだけだよ……？」

「ニ、ニス……？」

エリナちゃんはそう言いながら鍋から遠い位置にいた。

「うん、バイオリンに使うニスを作っているんだ」

「そ、その鍋の中に何が入ってるの？」

「え？ 魚の骨に、バナナやみかんの皮……とか」

ニスを作る材料は全て台所のゴミ袋から頂いてるけど……

「なんでそんなものを入れてるの!？」

さすがに信じられないのか目を見開いて僕を見てくる。

「前にも言ったけど、僕は父さんのブラッディ・ローズを超えるバイオリンを作りたいんだ。だからこのニス作りもそれを超えるための一歩」

「わ、わわわかったから……鍋に蓋をして!!」

僕はエリナちゃんに言われるがままに鍋に蓋をする。

「はあ……ワタルはよく平気でいられるね」

そう言っ僕を半目で僕を睨みつけてくる。

「え、平気じゃないの?」

「平気じゃないよ!?!むしろ平気の方がおかしいよ!」

僕の嗅覚がおかしいのかな……?」

「ワタルってもしかして匂いフェチ?」

「匂い、フェチ……って?」

「うくん……なんて言うんだろう……匂いに興奮する、とか……?」

「うくん……」

実際にどうなんだろう……色々なニスを作るために試しているけどニスのその時の匂いってあんまり気にしないから……

「多分、匂いフェチじゃないと思うよ……」

「ふくん、そうなんだ……」

「ていうか匂いに興奮するってあるの……?」

「ほら、好きな匂いってあるでしょ?それを嗅ぐと心がドキドキする感じ」

「世の中にはそういう人がいるんだ……変わってるなあ」

「ワタルも十分、変わってるけどね」

「そうかな……?僕ってそんなに変わり者なんだろうか……」

「ね、ねえ……ワタル、あの鍋の中身どうするつもりなの?」

「うん、あれのだしをニスと混ぜてバイオリンに塗るんだよ?」

「そういえば忘れていた……そろそろ頃合いかな。」

「僕は鍋の蓋を外して、そのまま液体だけをとある容器に入れる。」

「っ!」

「さすがに匂いに耐えきれないのか、エリナちゃんは思い切り鼻を摘んでこつちを見ていた。」

「嫌なら無理しなくていいんだよ?」

「液体を取り終え、僕は市販のニスをその液体とかき混ぜる。」

「ダ、ダイジョーブだよ……ワタシ、ワタルがどんな感じに作ってるかも見たいし!」

「若干、無理しているようにも見えろけどエリナちゃんがそう言うなら止める気はない。」

「……………」

僕は無言でバイオリンの表面にニスを塗っていく……

「……………」

エリナちゃんは匂いに少しだけ慣れたのか、鼻を摘んでいた指を外して真剣に僕の作業を見ている。

「だめだ……」

僕はニスを塗り終えたバイオリンの色を見てそう呟いた。

「え!？」

「はぁ……」

僕は大きなため息をつきながらそのバイオリンをゴミ箱に捨てる。

「捨てちゃうの?」

「うん……どうしても父さんみたいなバイオリンの色が出せないからね……」

「そう、なんだ……ワタルも大変なんだね……」

エリナちゃんはこれといった事は言わなかった。

「……………」

「……………」

少しばかり気まずい雰囲気の流れる。



ど、どうしよう……僕のバイオリン作りのせいで変な雰囲気になったけど。

「ね、ねえワタル、今度、ワタシの働いてるところ見に来ない？」

エリナちゃんが何か話題を切り出そうとしたのかそう口を開いた。

「エリナってどこで働いてたっけ？」

「ワタシね、カジノ特区で働いているんだ。ちなみにニコラも一緒」

「そう、なんだ……なら空いている日に来ようかな」

「明日とかダイジョーブ？」

「うくん……明日、明日……問題なさそう」

確か明日は風紀班の仕事もなかったし、多分問題ない。

「あ、じゃあ……ここにきてね」

と言って紙に何かを書いてその紙を僕に渡してきた。

これはその地図とエリナちゃんが働いているテーブルの場所だ。これなら迷うことなく行けそうだ。

今日も学院の授業が終わり、僕はみんなと一緒に食堂で夕食……いや、夜食？を頼んだ。

「そういえば最近、よくエリナが渡の部屋を出入りしているようだけど、変なことかしてないわよね？」

美羽ちゃんが僕をジツと睨み付けてくる……

「変なこと……？」

「そうね、例えば……そのやることはやってるみたい……」

「……？」

「え、ええええええ!!」

僕が首を傾げると布良さんが何かを察したかのように顔を赤くした。

「ミュー、ワタルに失礼だよ。ワタルはそんなことしないし、ていうよりもワタルはできないし」

「ま、それもそうね。渡って鈍いもんね」

「鈍いって動きが……？」

僕がそう言うのと、周りにいる美羽ちゃんやエリナちゃんが僕をジツと見てきた。

「自覚がないならもういいわ」

そう言っただけ息をつく、美羽ちゃん。

鈍いってどういうこと、だろう……？

「ここら辺、だったはず……」

僕は地図に示された建物の前に立ってそう呟いた……

「……………」

少しばかり緊張するな……こういうところって初めてだし……

とりあえず中に入ってみるとそこは様々な人がいた、と言ってもほとんどが若い人達ばかりだ。

「う……………」

こうも人が多いところは好きじゃない……

「少しだけ見て、帰ろう……」

そんな事を思っていると近くにいたテーブルの人達が気になった。

気になったのは三人……まず一人は長い金髪を結ってスーツとブレザーを着たニコラ君、二人目はここに僕を紹介したバニー姿のエリナちゃん、そして三人目は……

「……………」

少し敵つい顔をしている物静かにテーブルでカードを手に持つ黒髪の男性……あれ、あの人って……

「おや、渡君じゃないか……」

僕の視線に気付いたのかニコラ君が僕に話しかけてきた。

「あ、ワタル来てくれたんだ！」

「どうやらエリナ君が渡君を呼んだようだね」

「う、うん……」

「……………」

一瞬だけ黒髪の男性と目が合った。

「あー、ボクはお客様の相手をしないとイケないから、二人は初心者用のテーブルでゆっくりしていったら？」

「じゃあ、行こっか」

そう言っ僕に初心者用のテーブルの方に案内してもらった。にしてもあの男の人

……

「何やる？ルーレット？ポーカー？ブラッジジャック？バカラ？スロット？」

「個人的にはカード系のほうがいいかな……」

あまりルーレットやスロット系は僕の好みではない。馴染みのあるトランプの方がまだマシだった。

「じゃあ、ブラックジャックでもやる？」

「まあ、それぐらいなら」

とは言ってもあまりトランプとかはやったことがない……

「じゃあ、一応説明するね。トランプの数字の合計が21に近い方が勝ちなんだ」

「そうなんだ……」

「それで覚えて欲しいのは——」

数分程度でエリナちゃんの説明が終わった。なんとなくくだけけど、ルールもある程度覚えてた。

「とりあえずやってみる……？」

「うん……」

この間までは僕が教えていたけど、こうもジャンルが違うと逆になるんだ……

エリナちゃんがカードシューターと呼ばれるところから慣れた手付きでカードを引

き、僕の方に表向きで手元に二枚、エリナちゃんの手元に二枚を表と裏の一枚ずつ配置した。

「8と3……11、これは……」

エリナちゃんの公開されてるカードは10……裏向きのカードが気になるけど。

「どうするワタル?」

悪戯っぽい笑みを浮かべながら僕の様子を伺うエリナちゃん……

僕はエリナちゃんの問いかけに対して、コツコツと指を叩く。これはどうやらヒットと呼ばれるもので、もう一枚追加できる仕草らしい。

「だよね」

配られてきた数字は6……合計17……

コツコツ、と僕は勇気を持ってもう一枚追加する。

「ダー」

短い返答と共に配られてきたカードは3……これで合計20だった。

「えつと……」

僕はここで手を水平に振る。この合図はステイと呼ばれるもので、ここで引くのはおしまいってことらしい。

「当然かな。でもねワタル、そんな安全策ばかりじゃ勝てないんだよ」

そう言つて苦笑して、エリナちゃんは自分の手元にある裏向きのカードをオープンした。

「っ!?!」

その数字はA……ブラックジャックの場合、Aは1か11と扱われる。

Aを11と扱うと10と11の合計21……ブラックジャック。

最初に配られたAのカードが、Aと10、J、Q、Kのどれかの組み合わせだった場合をそう呼ぶらしい。

そもそもJ、Q、Kも10として扱うので10より上のカードといえは11のAだけだ。

「ナチュラルブラックジャックだね、残念♪ビギナーズ・ラックは来なかったね」

僕を挑発?するかのようになんて言ってきた……そう言われるとどこか悔しかった。

「も、もう、一回……」

「勿論、何度でもいいよ」

エリナちゃんがそう言つてカードを配る。

「9と5……ヒット」

合計14……

「ダー」

そう言ってもう一枚配られる、そのカードは5。

「合計19……ステイ……」

「それじゃあ今度はエリナだね。6と8の14。となるともちろんいくしかないよね」

そう言つてシューターから一枚抜き取り、そのカードをオープンする。

そのカードは7……

「合計21、またエリナの勝ちだね」

これつて運要素もあるんだろうけど、エリナちゃんに勝てる気がしなくなってきた

……

「強い……」

「そりゃね、ディーラーの勉強もしてるから、今日ルールを聞いたワタルには負けられな

いよ」

どうやら運要素があつても経験の差で大きく差が開いてしまらしい……

「もう一回いい？」

もう少しだけ僕は遊んでみようかな、つていう気持ちになる。

「にひひ、ワタルつてばギャンブルで熱くなるタイプなんだね。あんまり入れ込んじや

うと冷静な判断ができなくなるよ」

そんなつもりじゃないけど、少しばかりこういうのも面白く思えてきた。



「今度こそ勝てるかなあ？」

やっぱり何度やつてもエリナちゃんには勝てなかった。

「一度も勝てなかったね♪」

口に出して言うことじゃないのに、エリナちゃんが面白がるようにそう言ってくる。

「うっ、負けちゃったものは仕方ないけど……」

「まだやる？」

「もう大丈夫だよ。十分楽しんだから」

僕はそう言って笑ってみせる。

「そう、良かった。今度も遊びに来てくれる？」

「時間が空いたときにな……？」

僕はそう言って曖昧に答えて見せた。

「それじゃあ、また明日」

僕はエリナちゃんにそう言って手を振ってカジノを出ていく。

エリナはワタルに手を振って見送るとニコラが近づいてきた。

「渡君も可哀想に。チラツと見たけど、キミ、カードを下から引いてただろう？」

「あり？ そうだっけ？ 指が滑っちゃったのかもー」

「カジノでそういう事はしちやダメだって言われてるだろ。他のお客様に見られたら信用問題だよ」

「ごめんなさい。謝るから、今回だけは内緒にして、お願いっ！」

そう言つてエリナは手を合わせてニコラに頭を下げた。

「……本当、今回だけだからね」

「ありがとう、そういうえばニコラの方はお客様どうなったの？ 凄い連勝してたけど」

「あー、うん……あまり言うのは良くないんだらうけど、あのお客様、最後に大博打に出たんだ」

「ふむふむ、それでそれで？」

「負けて全部パーさ」

「もつたいないなあ……」

「そうだね、けど……」

「けど……?」

「そのお客様、負けたっていうのにたいそう驚かなくてそのままその場を去っていったよ」

「衝撃すぎて言葉が出なかつたんじゃ……?」

「とてもそうには見えなかつたけど……」

そう言つて少しだけあの時の事を思い出すニコラ。

「それに凄い目力だつなあ……どこか野生の獣みたいな、目……」

そう、ポツリと呟くニコラ……その言葉はエリナの耳には届かなかつた。

「主任、政府の方から荷物が……」

「ん? 荷物?」

「はい、ただ中身がわからないんですけど」

そう言つて長身の女性が主任が座っている机の上に銀色のアタッシユケースを置い

た。

「……………」

少しだけ顔を歪ませる主任。

「つたく……政府の方は何を送ってきたんだあ……？」

パチンツ、とアタツシユケースの留金を外す主任。

そして、アタツシユケースを開けた。

「これは……？」

「主任、何が入ってるんです？」

主任が少しだけ困惑した表情でアタツシユケースの中身を見る。アタツシユケースを渡した女性も横から覗いた。

「ナツクル？とベルト……？のようなものですね……」

アタツシユケースの中身を見た女性がそう呟いた。

「あ、ああ……ん、これは……？」

主任はアタツシユケースの上部分の方に、とある書類が貼られているのに気付く。

「あ……『Intercept X Attacker II』……？」

「えっと……翻訳すると”未知なる驚異を迎え撃つ”ですかね……」

「ふん……」

主任はそう言つてその書類をパラパラと見ていく……  
そしてとある単語に目が留まる……この単語は――

「――IXA<sup>イッキサ</sup> II」

## 再誕・イクサ変身

先日、エリナちゃんのカジノに行ってから数日が経った。

風紀班の仕事の方も順調というわけでもない、なにせ新しい薬の噂が入っていない

い  
「……おい、矢来、ちょっといいか？」

と、柘形さんが唐突に美羽ちゃんを見て少し戸惑うも呼んできた

「主任、どうしたんですか？」

「あー、お前に支給したいものがある。ちょうどいい、布良、渡、お前らも来い」

「私達も、ですか？」

僕と布良さんは思わずお互いの顔を見てしまう

そう言つて僕達が連れて行かれたのは銀色のアタツシユケースが置いてある机だった

「なんですか、これ？」

「とりあえず中身を見てみる、話はそれからだ」

柘形さんにそう言われ美羽ちゃんが渋々アタツシユケースを開ける

アタツシユケースを中身を見ようとする美羽ちゃんの間端から僕と布良さんは覗いた

「——っ!?!」

僕はその中身を見て思わず絶句した

中に入っているのは少し大きめのナツクルにベルトの二つだった

「……主任、これは……?」

「つい先日、本土の方から送られてきた物資だ。えっと、正式名称は” I n t e r c e p

t X A t t a c k e r II” ……だったか?」

「いんたーせぶといくすあたつかーっ?」

布良さんはその名称を復唱しながら首を傾げた

” I n t e r c e p t X A t t a c k e r” ……そのあとに” II” が付いてい

る理由は知らないけどこの単語は知っている

これは通称……

「——I X A <sup>イクサ</sup> IIと呼ばれているものだ」

僕の思っていた単語を枳形さんが口にした

「詳しくは知らんがなんでもこのイクサとかいうのは本土のとある組織がファンガイアを倒すために使っていたヤツだそうだ」

「とある組織……?」

「そこまでは知らん、が……これと一緒に送られてきた取扱説明書の中に入っていた手紙を見るとどうやらコイツはその二号機だそうだ」

柘形さんがそう言つてパンパンと軽くアタッシユケースを叩く

「なぜ、これを私に?」

「まあ、これは一応誰でも使えるらしいんだが……」

「誰でも使えるならまだファンガイアと戦えない力を持つ渡の方がいいのでは?」

そう言つて僕を横目で見る美羽ちゃん。僕の心配をしてくれるのは嬉しいけど……  
言い方が……

「そうしたいのは山々なんだか、なにせこれはまだ試作機らしくてな。常人が使用しても数分しか身体が保たないんだ」

柘形さんがそう言つてアタッシユケースの中に入っているベルトを睨みつける

「……なるほど、常人では無理でも吸血鬼なら長時間使用が可能だと……?」

「そうだ、だからこれをお前に頼みたい。大丈夫か……?」

「……ファンガイアを倒せるなら問題ないです」

美羽ちゃんは決意を示すかのように真剣な表情でそう言った

「よし、わかった……矢来、使う前にはこれを読んでおけよ」



桁形さんはそう言ってアタツシユケースの中に入っていた取扱説明書を美羽ちゃんに手渡す

「了解」

イクサはイクサナツクルと呼ばれるナツクルを体の一部に当てて解析させ、パスワードを装着し敵と戦う存在だ

僕や装着者はその存在をこう呼んでいる

——仮面ライダーイクサ

そもそもこのイクサは対ファンガイア対抗組織『素晴らしき青空の会』が開発したパスワードスーツで、その組織に所属している、麻生 恵さんの祖母が開発していたパスワードスーツだ

だが、約35年前に開発途中でファンガイアに襲われイクサは未完成のまま終わってしまう

そしてなんとか23前に使用され、そのイクサを使用した内の一人が僕の父、紅 音也だ

けど、まだ23年前のイクサはまだ全開というわけではなくそこからさらに改良され多くのファンガイアを殲滅できることが可能になったのが今のイクサ……と言ってもそのイクサがこの海上都市にはいない

そのイクサの装着者である名護さんは今も本土で戦っている、人に害を為すファンガイアと……

「……………」

美羽ちゃんがジツと取扱説明書を見ている……美羽ちゃんが仮面ライダーイクサに変身……何かなあ……

嫌というわけではないけどちよつと気が引ける感じがする……

「矢来、説明書を見るのもいいがちゃんと巡回もとけよ」

「わかっています、主任。じゃあ、渡行きましようか」

そう言つて美羽ちゃんが陰陽局を出ていく。僕もそれに付いていった

「……………」

ペラ、と美羽ちゃんが説明書を度々見ながら巡回する

美羽ちゃんがイクサに変身するのか……大丈夫かな？と僕は少しだけ不安を覚える

イクサを装着するということは今まで以上にファンガイアと戦うということになる

……

イクサもファンガイアに対して無敵ではない

ファンガイアにも階級がある。上級ファンガイアと対峙したら美羽ちゃんもひとたまりもないだろう

「……………」

「……………」

僕はそんな事を考えながらお互い無言のまま商店街や大通りなどを巡回していき

……

「……………」

「……………」

あまり人気がない小道まで来た。周りが静かなせいか遠くに響く何か走る音が僕たちの耳に届く

ダツダツダツ！とその音は段々ところちらに近づき、そして目の前の曲がり角でそれは現れた

「っー！」

スーツを見出しながら息を切らしている青年だった

青年は僕達を一瞬だけ見ると少し安堵したかのような表情をする

「あ、あの……？」

僕は少し不思議に思いその青年に声をかけた

「た、助けてくれっ！お、お追われてるんだっ!!」

その青年が顔を青ざめながら僕の両肩を掴みながら僕の体を前後に揺らす

「お、落ち着いてください……えっと……」

何があつたんです？と聞こうとした時、誰かがこつちの方向に走ってくる音が聞こえた

「き、来たあ……！」

青年は僕の後ろに隠れるように移動し震えた手で僕の肩を掴んでくる

「チツ……まさか人がいるとはな」

「……………」

先程、青年が飛び出してきた道から二人の蔽つい顔の男性が現れる

そして、僕と美羽ちゃん、そして僕の背後に隠れている男性を睨みつけるようにそう

呟いた

「あの、何があつたんですか？」

美羽ちゃんが距離を保ちながら二人の男性にそう聞いた

「……………」

「……………」

その言葉を聞いて二人の男性はお互いの顔を一瞬だけ見合うと表情が一変した

「っ!?!」

「ファ、ファンガイア!」

二人の顔にステンドグラスのような紋様が浮かび上がり直後、異形の姿へと変わる

赤いファンガイアと青いファンガイアだ

「どこか離れていてくださいっ!」

僕は背後の青年にそう言うのと一歩ずつ、その場を下がり始める

ファンガイアもゆっくりと僕たちに近づいてきた

「事情はわからないけど、丁度いいわ。早速試してみようかしら。渡、血を吸つてもいい

？」

「美羽ちゃん、まさか……………」

「ええ、そのまさかよ。だからいいかしら」

「う、うん……………」

美羽ちゃんはそう言うのを素早く僕の首筋に吸血鬼の牙をたてる

その様子を見たファンガイアは余裕だと思っっているのか特に変わった様子は見せな

かった

「じゅじゅ……じゅる、じゅる……」

立たれたところから僕の血が出てきて美羽ちゃんは僕の血を啜っていく

「さて、行くわよ……」

僕の首筋から口を離れた美羽ちゃんは僕の一步前に立ち、今日支給されたベルトを自分の腰に巻き付けた

「渡、下がってて」

美羽ちゃんはそう言うのと内ポケットからベルトと同じく支給された大きめのナツクルを取り出し、そのままナツクルを自分の掌に押し付けた

『レ・デ・イ』

ナツクルから聞こえる電子音が美羽ちゃんの体を解析し終えていた

「っ!？」

ナツクルから聞こえる電子音にファンガイア達はその場で身構えた

「——変身」

美羽ちゃんは静かにそう呟き、そのままそのナツクルをベルトに差し込んだ

『フ・イ・ス・ト・オ・ン』

ベルトから発せられる電子音と共にベルトから十字架のような物が出現し、回転しながら美羽ちゃんの前に出てくる

そして、その十字架のようなものを起点としてパワードスーツが出現され美羽ちゃん  
の体を覆った

白を貴重とした戦士のような姿のパワードスーツ——仮面ライダーイクサが僕の  
目の前にいる

「着心地がいいわね……」

美羽ちゃんはそう言って両手の指を動かしながらそう言った

「——っ！」

今まで余裕そうにこちらに迫ってきたファンガイアの一体が突如、焦りを感じたのか  
イクサに飛びつくように襲いかかる

「はっ！」

だが、イクサは隙のない動きで飛びついてくるファンガイアを殴る

「……………」

飛びついてきたファンガイアはそのまま吹き飛ばされ、転がっていく

もう一体の赤いファンガイアはそのまま剣を振るって襲いかかる

「っ！」

イクサは剣を左腕で受け止め、そのまま右手でファンガイアの手首を掴む

そしてそのままファンガイアに何度も膝蹴りをし、そのままファンガイアを押しやり

地面に叩きつける

「これを使つてみようかしら」

美羽ちゃんはそう言うのと左手を手前に出し、そのまま少し下へ動かす

「……!?」

すると目の前で地面に伏せているファンガイアが急に起き上がらなくなった。これはおそらく美羽ちゃんの吸血鬼の能力をファンガイアに使ったんだらう……

「……………」

そして、美羽ちゃんはイクサベルトの右腰から銀色のホイッスルを取り出すと、そのままイクサベルトの中央部分に差し込んだ

『イ・ク・サ・ナ・ツ・ク・ル・ラ・イ・ズ・ア・ツ・プ』

そしてイクサはその電子音と共にベルトからイクサナツクルを取り出し構える

イクサナツクルに5億ボルトのエネルギーが集中される

「はあっ!!」

ダアンっ!という音とともに目の前の地面に伏せているファンガイアにイクサナツクルを思いつける

直後、イクサナツクルから放たれた山吹色のエネルギーが粉碎されファンガイアをの体を砕いた



「っ……！」

一瞬だけイクサは体をよるめかせるけどもう一体の青いファンガイアを睨みつけた  
『くっ……！』

もう一体のファンガイアは半歩後ろに下がりながらイクサを睨み返す

「……………」

「……………」

お互い動かず一瞬の静寂……

『チッ……！』

だが、それを破ったのはファンガイアだ

逃げようと試みてファンガイアがイクサに背後を見せたその時だった

ダダダダダッ！とイクサが素早い動作でいつの間にか持っていた大型の銃をファンガイアの背に連射した

「逃さないわ」

そう言つてイクサは左手を前に突き出し左へと手を動かす

直後、ファンガイアは何かを押されるかのように体が左へと吹き飛ばされ壁に叩きつけられる

「最後はこれで決めるわ」

イクサはファンガイアの元まで近づくと手に持っていた銃のマガジン部分を押し、剣形態へと変形させた

そして、イクサベルトから金色のホイッスルを取り出しそのままイクサベルトの中央部分に差し込んだ

『イ・ク・サ・カ・リ・バ・ー・ラ・イ・ズ・ア・ツ・プ』

イクサベルトの電子音と共にイクサの背後に太陽のように輝く球体が現れ、イクサの剣が光を纏う

「これで終わりねっ!」

イクサは剣を両手で構えると少し大振りに振り上げる

そのままイクサはファンガイアに袈裟斬りに剣を振り下ろす

高威力の斬撃はそのままファンガイアの体を粉碎する

「っ!」

「美羽ちゃん!」

変身が解除され、美羽ちゃんがその場で片膝を付く

「だ、大丈夫よ……」

美羽ちゃんはそう言うのと立ち上がる

「そう……ならいいけど、無理したら……」

「それぐらいわかってるわ」

本当にわかってるのかな……？

「あっ……」

僕はそう思いながら先程の青年の事を思い出し後ろを振り返る

「ヒ、ヒイっ！」

その青年は近くの電柱を盾に身を隠していた

「あ、あの……なんであのファンガイア達が貴方を追っていたのか詳しく聞かせていただけませんか？」

僕は青年に近づいてそう聞いた

ファンガイアに追われていた青年の名前は『倉端 健太』 22歳

なんでも新しい生活をしたくてこの海上都市に引っ越ししたらしい

それはいいとしてなぜ彼がファンガイアに追われていたのかと言うと新しい生活を

始めていざ、仕事を見つつけようと思ったときにとある人から勧誘されたらしい

その仕事は簡単なものらしく給料も高い、というのが魅力だったらしく詳しい仕事内容も聞かずその仕事を始めたらしい

けど、その仕事を始めようと仕事場に着くとそこは違法な薬の取引業者で彼はその下っ端として働いていた

さすがに健太さんも犯罪に足を入れてると思ったのか上司に辞めたいと言うと

『お前が辞めるのは勝手だがそんな時は命がないと思えよ?』

と上司の姿がファンガイアとなり脅されていたらしい

そして脅されて数ヶ月が経ち、健太さんは我慢の限界だったのか風紀犯と接触できる

ように深夜に薬を持ち出し脱走……そして美羽ちゃんに助けられるという事に至った

「で、これが被害者が持ち出した薬らしいが……」

そう言って柘形さんが僕達の目の前に少し大きめの注射を置いた

「これ、どういう薬なんです?」

「被害者の話によると、この薬は吸血鬼用らしく。吸血鬼に使うことによつて吸血鬼からファンガイアになることができるらしい」

「吸血鬼を……ファンガイアに……?」

吸血鬼をファンガイアに……その言葉を聞いて一瞬だけ背筋に悪寒が走る

それは昔、兄さんが人間をファンガイアにしていたのと同じことをしてるようなものだ

この都市にいるファンガイアはそんな事を考えていたということになる

「吸血鬼にもいるだろう？自分の力に酔って犯罪を犯す奴らが。そういう奴らにこの薬を売っているらしい」

「なんで、そんな事を……」

「そこまでは知らん……被害者も多くは知らないらしい……」

「けど、その薬って政府に認められてないんですよね？」

「当たり前だ。面倒な事になってきたな……」

柘形さんはそう呟きながら後頭部を掻く

「この件は上に報告して、明後日に被害者が教えてくれたブツが隠されている倉庫に入する」

明後日……

「しゅ、主任……」

「どうした、紅。何かわかったのか？」

「い、いえ……その、明後日どうしても外せない用事があつて……」

「……どうしてもか？」

「はい、どうしてもです」

僕は真剣な眼で柘形さんを見る

「チツ……わかった。お前は出なくていい」

「あ、あの……主任」

柘形さんがため息をつくと今度は布良さんが声を上げた

「なんだ、布良、まさかとは思うがお前も……」

「え、えつと、そのまさかなんですけど……」

「……………。矢来明日はお前一人に任せてしまっけど大丈夫か？」

柘形さんは真剣な表情で美羽ちゃんを見る

「はい、問題ありません」

「そうか……ということだ。布良も明後日は出なくていい」

「ありがとうございます」

「今回は余分に応援を呼ぶか……」

柘形さんは少し苦い顔をしながらそう呟いた

# 疾走する運命

——倉庫突入当日

「よし、お前らもうすぐ突入だ。気を引き締めろよ」

主任が静かに無線を通してそう言った

「矢来、吸血は済んでいるな？」

「はい、いつでも行けます」

主任の言葉に頷いて美羽はコートの中のイクサナツクルを見せた

「よし、全ユニット突入！」

主任がそう叫ぶと素早い動きで建物に隠れていた警官達が建物の中へと突入していき

勿論、その突入に主任や美羽も続く

建物の中にはスーツを着た男が9人

「動くな！手を頭に当て膝を付け！」

警官の言葉に従ったのが9人の内、2人

それ以外の7人は違う反応を見せる。

「……………」

パキパキ、と6人が顔にステンドグラスのような模様が浮かび上がった

「つ、ファンガイア!」

それを見て美羽は警官達の一步前へと出た

『レ・デ・イ』

すぐにイクサナツクルを自身の掌に当てて自身を解析させる

「変身!」

『フ・イ・ス・ト・オ・ン』

そして、イクサナツクルをすぐにイクサベルトに差し込みイクサへと変身する

それと同時にその内の二体のファンガイアがイクサの方へと攻撃を仕掛けた

「つー!」

イクサはそのままファンガイアの攻撃を避けると銃であるイクサカリバーを剣形態へ変形させるとそのままファンガイアを斬りつけた

「——かかってきなさい」

イクサはそう言って剣を構え二体のファンガイアを睨みつけた



建物の裏手の路地に複数の警官が少しづつ後退しながらも応戦する

「くっ！」

「これじゃあどうしようもないっ……くそっ！」

警官達はそう言って更に後退していく

「——キバット」

僕はその様子を建物の上から確認する

理由はもちろん、ファンガイアを倒すためだ。違法な薬を売って吸血鬼をファンガイアにする

僕は昔見た。人間からファンガイアになった人を……だが、その人は苦しそうに藻掻き……人間の理性を失う

吸血鬼がファンガイアになるとどうなるかわからないけど、ただ無事ではすまないと思う

だから、僕はそれを止める……ファンガイアも

「よっしや、キバって行くぜー！」

僕はキバットを右手で掴みそのまま僕の左手にキバットの魔皇力を流し込む  
パキパキパキ、とステンドグラスのような模様が僕の顔に浮かび上がる

「――変身」

そして僕は腰に出現した赤いベルトをキバットにセットした

パリン！と何かが割れる音と同時に僕はキバへと変身する

ザツ！と僕は建物の屋上から飛び降りるため床を蹴り跳躍する

そして僕はベルトから緑色のホイッスルを取り出しそのままキバットの口へと差し込んだ

「よっしやー！バツシャーマグナムー！」

キバットから発せられた笛の音が緑色の何かを呼び出した

僕はそれを右手で受け止めると、キバの右腕と右肩、銅部分、そしてキバの複眼が緑色へと変わる

「はあっ！」

そして僕はすかさず落下地点にいるファンガイアの方に緑色の何かを構えた

緑色の何かはその場で展開し、三つのヒレのような物が付いた銃へと姿が変わる

そして四発、トリガーを引いた

「っ!？」

パパパパッ!と音速以上の速さで撃ち出される水の銃弾がそれぞれ2発ずつファンガイアへと直撃する

僕は上手く警官とファンガイアの間へ割り込むように着地しファンガイアを見た

「き、キバ……」

背後から警官の声が聞こえるけど僕はそれになんの反応もしない

ファンガイアが二体同時にこちらに接近してきた。僕はすぐにバツシャーマグナムを構えてその内の片方に水の銃弾を連射する

当然、片方はその場で吹き飛ばされるが……もう片方のファンガイアはそのまま攻撃範囲へと距離を詰めてきてそのまま拳を振り下ろそうとしてくる

僕はそれを身をかがめて避け、そのまま足を踏ん張ってファンガイアにタックルして押し返す

『くっ……』

「よし、決めるか!」

僕はキバットの言葉に心の中で頷き、銃で言うハンマー部分にあるバツシャーマグナムのヒレをキバットに加えさせる

「バツシャーバイト!」

キバットがそう言ってバツシャーマグナムに魔皇力を注入し始める

そして、それだけではない。バツシャーマグナムの力によって僕の周りの地面が水面へと変化していく

「……………」

バツシャーマグナムの三つのヒレがフィンの様に回転していき、それに呼応するかの様に僕の地面の水面の水がバツシャーマグナムの銃口へと集まって行く

「……………」

そして、僕はその銃口を目の前の二体のファンガイアへと静かに向ける

そして、僕は静かにトリガー引いた

音もなく発射された水の砲弾はそのままマツハ2以上の速度でファンガイア達へと命中した

「……………」

僕はそのままステンドグラスの塊のようになったファンガイア達の手前まで近づき、そのまま触れる

パリン！と二体のファンガイアの体はその場で碎け散った

『イ・ク・サ・カ・リ・バ・ー・ラ・イ・ズ・ア・ツ・プ』

部屋に響き渡るイクサベルトの電子音と共にイクサはイクサカリバーを構えた

「ハアアツ!!」

イクサの叫び声と共にそのままイクサカリバーを横風に振るう。半弧を描くような斬撃はそのまま二体のファンガイアの体を斬り裂き、粉碎する

「そういえば他のファンガイアは……」

イクサはそう言うのと他のファンガイアを探しに行く

「あれは……!」

イクサは建物の外を出てとある者を見た

「……………」

右手にバツシャーマグナムを持っていたキバだった

「キバっ!!」

イクサはそう叫び手に持つイクサカリバーを銃に変形させて構えた

「……………!」

イクサの声がキバに聞こえ振り向いた瞬間、イクサはトリガーを引いた

「っ！」

ダダダダダッ！と何発もの銃弾をキバの鎧に撃ち込んだ

「はあっ……」

そしてイクサはそのままイクサカリバーを剣形態へと戻してキバの元へと駆け込む

「……っ！」

それを見たキバはすぐにバツシャーマグナムを構えるとイクサの方へと数発撃ち込んだ

「くっ！」

キバの射撃を警戒してイクサはその場で足を止めた

だが、キバのバツシャーマグナムから射出された水の銃弾はイクサには命中せずイクサの手前の地面で水が弾け飛ぶ

「しまったっ……！」

足止めされた事に気付いきキバの方を向く、が……そこにはキバの姿はもうなかった

美羽は変身を解除するとすぐに主任の元へと戻った

「主任、他のファンガイアは？」

「ああ、こつちの二体は白いキバが現れて倒していったよ、だが……」  
「……？ どうしたんですか？」

「いや、一人逃してしまつてな……」

「そう、ですか……」

主任の言葉を聞いて美羽は残念そうな顔をして俯いた

「だが、気にするな。ファンガイアではないと思われる二人は逮捕できたんだから」  
「わかりました」

美羽ちゃん達が倉庫に突入していく次の日、僕は陰陽局に顔を出す

「主任、昨日の件……どうなつたんですか？」

「それがだな、少しだけわかつたことがある。昨日、捕まえた二人から聞いてな、やはり、この薬は吸血鬼をファンガイアへと変貌させる薬だ」

「……！ さすがにこれを聞いて僕は同様を隠せないそんな事したら……」

「最初はこの薬を使った吸血鬼は苦しくなるが段々とそれが弱まりファンガイアの体に慣れてくるんだ」

そうやって僕と美羽ちゃん、それに布良さんの顔を見て話す

「それにファンガイアとなった吸血鬼は普通のファンガイアとは少々違うらしい」

「少々、違う……?」

その言葉に美羽ちゃんは首を傾げた

「ああ、どうやらファンガイアとなった吸血鬼はどうやら吸血鬼の時に使用できていた能力を使えるらしい。それだけじゃなく吸血鬼の身体能力に加え、ファンガイアの力も加わることになる」

「え、それじゃあ……」

「そうだ、下級ファンガイアよりも断然強く……そして、上級ファンガイアに匹敵するほどの力を持つということだ」

上級ファンガイアに……もしそのファンガイアとなった吸血鬼と出逢えば恐らく今のキバでは歯が立たない……そうとなれば……

「しかも、今回捕まえた奴らから聞いた話はもう一つある」

「もう、一つ……ですか?」

「ああ、なんでもこの薬を作っているのは別の組織らしい……それも大きな、そして世界各地に支部があるらしい組織だ」

「大きな組織……そんな組織がこの海上都市で何を……」



「わからん、だが言えることは吸血鬼を使って何かをしようとしているのは確かだ」  
そんな組織がこの都市にいるなんて……しかもファンガイアが関わっているってこ  
とになると……

どうやら僕はまだ本土へ帰るのはまだ先らしい……